

第3部
筑紫の大城



宇美町から眺めた大野城跡

第3部 筑紫の大城

第1章 古代山城とG I S	赤司 善彦	153
第2章 大野城の研究成果	赤司 善彦	165
第3章 糟屋屯倉と怡土城からみた大野城	重藤 輝行	169
第4章 文献史料からみた大野城	松川 博一	173
第5章 大野城の土木技術	入佐 友一郎	177
第6章 大野城と古代日本の戦争	小嶋 篤	181
第7章 大野城と宇美の歴史的繋がり	松尾 尚哉	185
第8章 大野城築城と新羅	上田 龍児	189

第3部では、「筑紫の大城」と称される大野城を検討する。第1章では、古代山城研究の基礎資料として、航空測量等を利用したG I Sの成果をまとめる。第2章以降では、考古学・文献史学・土木工学・地域史という各分野から多角的に大野城を追究する。大宰府政庁を見下ろす防衛施設の大野城は、大宰府の軍事機能とも直結する。

なお、第1章は新稿である。第2章～第7章は、平成28年（2016）2月27日に、九州国立博物館・福岡県・宇美町が合同開催したシンポジウム「大城（大野城）の謎に迫る！」の当日配布資料を再掲載（一部加筆、改変含む）したものである。

第8章は、平成27年（2015）11月3日に、九州国立博物館・福岡県・太宰府市教育委員会が合同開催した講演会「新羅王子がみた大宰府」の当日配布資料を再掲載（一部加筆、改変含む）したものである。

【日時】平成28年
2月27日 土
13:00～16:30 (受付は12:30から)

【会場】九州国立博物館
ミュージアムホール
(大宰府市石坂4-7-2)

【定員】280名
※参加費無料

シンポジウム
大城（大野城）の謎に迫る！
宇美町からの新たな発信！

大野城跡 宇美町界からの空撮

プログラム

【開会式】13:00～13:05
【基調講演】13:05～13:45
「大城（大野城）の謎に迫る！」
赤司 善彦（福岡県文化財保護課長）

【発表1】13:45～14:05
「考古学から迫る！」 重藤 輝行（佐賀大学教授）

【発表2】14:05～14:25
「文献史料から迫る！」 松川 博一（九州歴史資料館 学芸員）

【発表3】14:25～14:45
「土木技術から迫る！」 入佐 友一郎（福岡県文化財保護課 技術主事）

【発表4】14:45～15:05
「古代兵器から迫る！」 小嶋 篤（九州国立博物館 研究員）

【発表5】15:05～15:35
「地元・宇美町から迫る！」 松尾 尚哉（宇美町教育委員会 学芸員）

【パネルディスカッション】15:35～16:25
コーディネーター：赤司 善彦
パネラー：重藤 輝行、入佐 友一郎、松川 博一、小嶋 篤、松尾 尚哉

【閉会式】16:25～16:30

主催：宇美町・九州国立博物館 後援：福岡県教育委員会・西日本新聞社
問い合わせ：宇美町教育委員会 社会教育課 電話：092-933-2600

「大城（大野城）の謎に迫る！」ポスター

第1章

古代山城とGIS

赤司 善彦

はじめに

近年、リモートセンシング技術やGPS（全球測位システム）、さらにはGIS（地理情報システム）が考古学の分野でも活用されるようになってきた。

7世紀から8世紀にかけて西日本一帯に築かれた古代山城は規模が大きく、その立地は周辺地形との関わりが強いことからGIS（地理情報システム）を活用した各種の分析に適している。とりわけ可視領域などの空間分析での活用が期待できると思われる。そのためには詳細な微地形データに土塁線の状況が示されなければ、GISの分析は不可能である。これまで、その城壁線は、1/1000や1/2500の地形図に記されて周辺地形と併せて把握されてきた。

さらに、平板測量によって城壁線とその周辺地形が把握されてきたが、古代山城の城壁線は少なくとも2km以上と規模が大きいため、平板測量では多くの人出と時間が必要である。また、草が茂る夏場に限らず、樹木の生育状態では踏査そのものが困難な場合もある。

図1は佐賀県基肄城である。これまで現地踏査によって土塁線が推定され、その土塁線が1/2500の地形図に記載されている。この地形図を頼りに現地を踏査してみた。図2のように樹木管理のために伐採も行われていることもあって、現地では土塁を確認することはできず、足を踏み入れることも困難である。

そこで本研究では上記の新しい技術を用いて、正確かつ簡便な手法による城壁線や古代山城の地形データを取得しGISを活用したデジタルアーカイブの構築など、古代山城の新しい研究基盤を確立しようとするものである。

1. 研究の概要

(1) 航空レーザー計測による古代山城と周辺地形の数値標高モデルの取得

これまで古代山城は、等高線によって示された2次元の地形図にその城壁線を記すことが一般的であ



図1 基肄城（佐賀県基山町）遠景



図2 城壁線付近

城壁線は踏査も困難であり、土塁も確認できない。

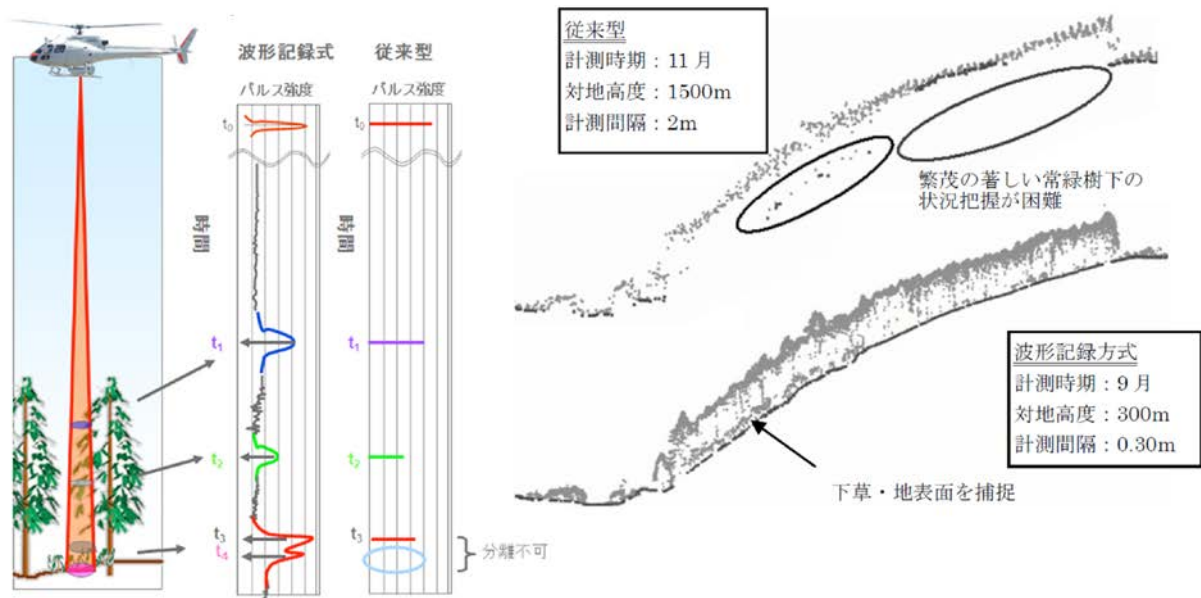


図3 レーザーの記録方式の比較

波形記録方式およびヘリコプターによる細密計測により、従来に比べて地形検出の精度が改善した。

る。これではなかなか地形の把握が容易ではない。これを解決する地図が立体地図（デジタルマップ）である。カーナビで使われている立体表現は、現地との対応にまことに便利である。最近では写真や地形図に垂直方向の標高データを加え傾斜の度合いを色で表現し、さらに一定方向の陰影をつけることで、より立体表現が可能となった。その決め手が標高データの取得である。最近、国土地理院が提供する10m方眼の標高データ（DEM）も入手が可能となっている。より細かいメッシュでのデータが得られれば、当然精緻な立体地図が出来上がることになる。

ところで、紙の地形図の作成方法は、上空から撮影された山容の写真を立体視して図化するのである。山岳地の場合には、当然にして樹林が写っている航空写真を用いることになる。そ

のため現地の標高データを基に補正はされているが地表のひだを正確に反映しているわけではない。標高にも若干の誤差がつきまとっている。

近年、航空レーザー測量という最新技術が登場し、地球の襞を表現することが可能となり、土砂崩れ危険地のハザードマップなど各種の応用がなされつつある。この技術はレーザー光を地表に発射し、反射して戻ってくる時間差により地上までの距離を測るのである。航空機の高さを計算して、地面の標高を導き出すのである。今回の研究では、通常のセスナではなくヘリコプターに搭載した装置で計測した。ヘリ計測であればスピードを遅くすることができるため、それだけ地表を密度高く捉えることができるのである。1秒間に10万発のレーザーを照射する。この方法では50cm間隔での計測が可能である。つまり50cmの大きさの構造物であれば、これを計測して表現することが可能となったのである。

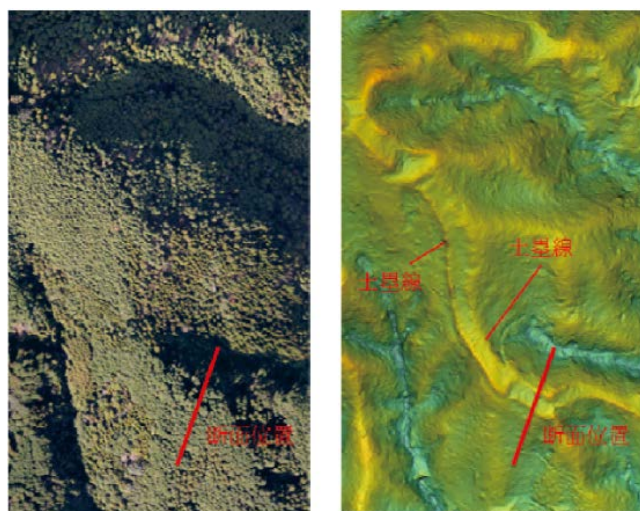


図4 航空写真とレーザー計測の比較

左のように地形図はこのような航空写真から作成される。航空写真では樹木を撮影するので、地表の状況は把握できない。これにたいして右のレーザー計測では、微地形だけでなく土塁線を捉えることができた。

もちろん、レーザー照射によって得られた点群データから地表面のデータだけを抽出するデータ処理はかなりむずかしいが、これまでにいくつかの山城を計測してきた経験で、その精度を高めることができた。

また、このレーザー計測によって、土塁線そのものが明瞭に判読できたことも大きな成果である。

以下の古代山城について、九州国立博物館アジア文化交流センターでは科研費等も一部活用しつつ、古代山城のレーザー計測による詳細なDEMを作成した。

1mDEM

- ・福岡県 特別史跡大野城跡
- ・福岡平野～大宰府地域

50cmDEM

- ・佐賀県 特別史跡基肄城跡
- ・福岡県 史跡高良山神籠石山城
- ・福岡県 阿志岐山城
- ・山口県 石城山神籠石山城

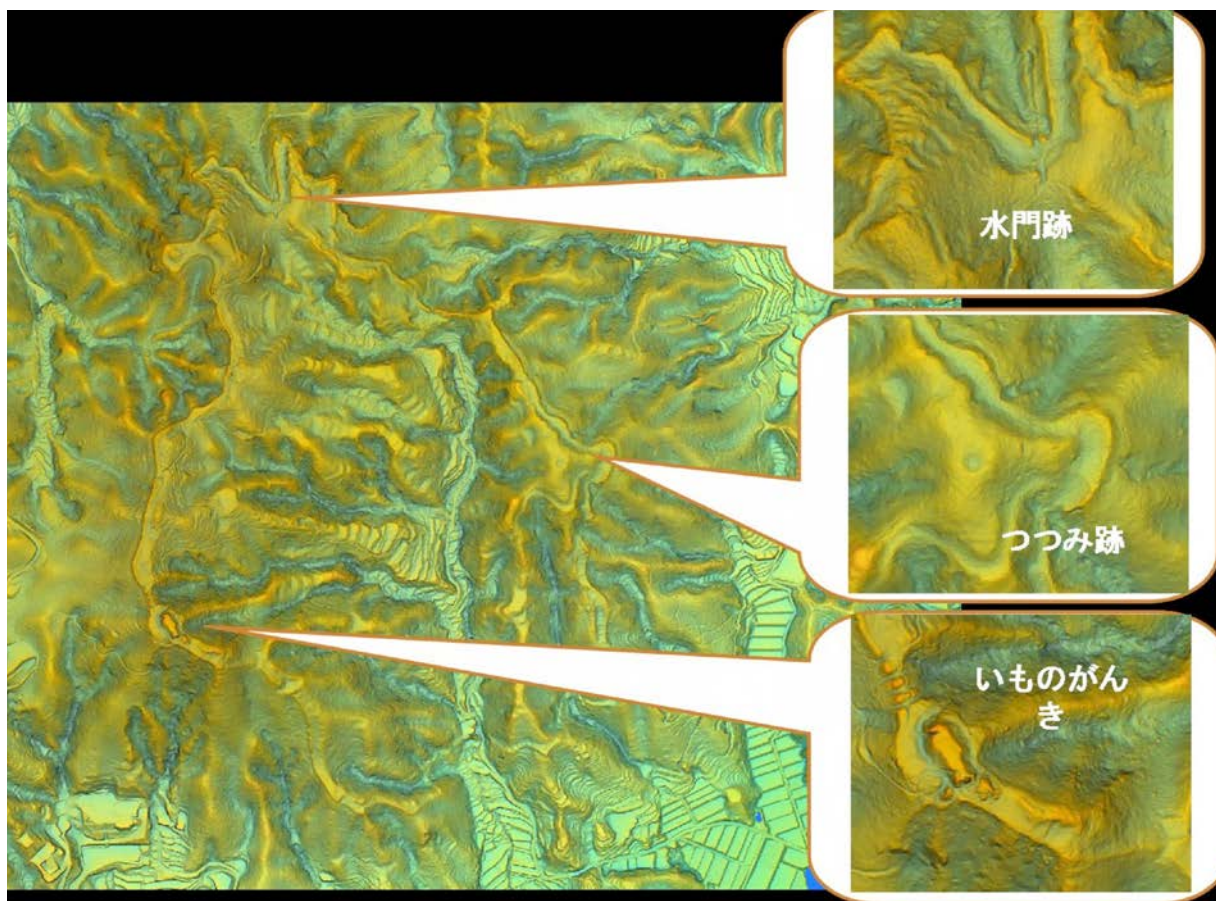


図5 基肄城の傾斜区分図（レーザー計測で50cmDEM作成）

(2) 携帯GPS機器による城壁線の測量

詳細な地形データが取得できたことで、地表の起伏を捉えてはいるが、これだけではまだ土塁線は確定ではない。やはり現地での再確認が欠かせない。

現地での城壁線の測量は、これまで平板測量を実施してきたが、膨大な労力が必要となる。測量機器も近年は進化し、携帯GPSを用いることで、現地踏査で再確認した土塁線の観測データを簡単に得ることができるようになった。本研究では市販されているハンディGPS機器を携帯して土塁線の現地踏

査をおこない、その軌跡データを処理することで土塁線を確定しようと実証実験を繰り返した。(使用機器 Garmin60CSx)

このGPS機器による現地測量のデータを用いて、レーザー計測した土塁線を修正することで正確な基本データを完成させることができるのである。これに種々の土塁の属性(外壁式・両壁式・折衷式、列石の有無、石築・土築、土塁の有無等)を反映した土塁線のデータベース化や、地形分析等が実施できる見通しが立った。

もちろん簡易なGPS測量がどの程度有効であるのか、その検証も試みた。その結果、GPS観測の軌跡は最大でも1mほどの誤差であることが判明したこのように現地測量とDEMの標高値を勘案した誤差修正をおこなうことで、土塁線の正確な基本データを完成させることができる。

この手法では、市販のGPS機器を2台用いて、クロスチェックすることが望ましい。また、軌跡は自動設定で線情報として記録されるが、土塁線の属性(方向変換点・列石の有無・土塁の有無など)を記録するためには、その地点を細かくマークし、さらに地形図にその番号と内容をメモしておくといよい。最も有効な手段はICレコーダにマークした地点番号と内容を記録しておくことである(後処理がやりやすい)

今回、国内の古代山城だけでなく、韓国の扶余に所在する扶余羅城もGPS測量を実施する事ができた。韓国の山城研究者との合同調査であり、今後の日韓の研究交流の共通基盤が形成されることに発展すると思われる。

今回の研究では、大野城跡及び基肄城跡でのGPS機器による実証実験を繰り返し実施した。その他に国内7つの古代山城と、韓国での山城を計測することができた。

2. 古代山城のGISによる分析

この古代山城の城壁線を記したデジタルマップを用いて、今後はGISによるさまざまな分析をおこなうことが可能となった。山城の各任意の地点からの眺望や、推定古代道路からの可視領域、あるいは烽火や他の山城との可視関係などを地図上に表示することが可能である。その他にも、傾斜を考慮した城壁の規模確定や、自然地形の傾斜と城壁築造の相関関係の分析などへの応用も期待できる。

ここでは一例として古地図との重ね合わせの成果を紹介する。大野城と基肄城の研究に欠かせない前近代の古地図に、文化3(1806)年頃に制作された『太宰府旧蹟全図』がある。この古地図は2枚からなり、北図は大野城、南図は基肄城を中心に地形と遺跡が描かれている。山の稜線や河川、道路を墨書きし、



図6 GPS測量のログデータ

これまで地形図に記された城壁線にログデータを重ねたところ、ログデータは城壁線の出入りを測定している。

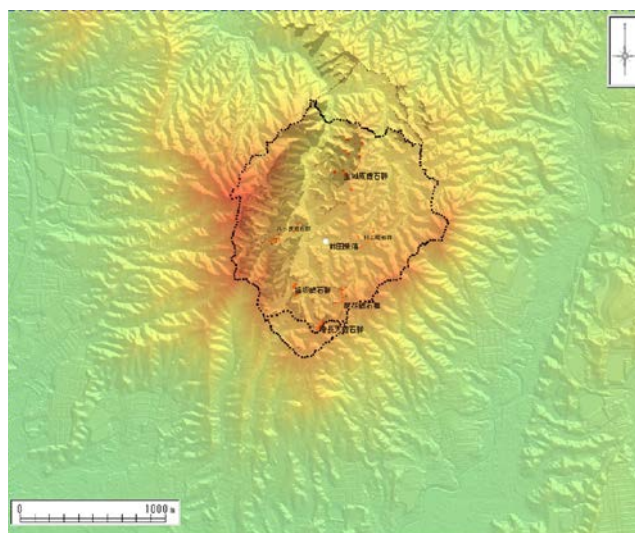


図7 大野城の主城原地区からの可視領域

主要な建物が置かれた主城原地区からは、村上地区を除いて、全ての倉庫群のある地域を可視することができる。

これに細かな注記が施される。北図の大野城を例にとると、山城の土塁線が明確に線で示されていないが、土塁線内側を濃く彩色して周囲とは区別することで、城の範囲を図示している。その他に礎石の分布も記されているが、なにより未発見の城門遺構を示す注記がある。土塁の一部に「クロカ小岩 門ノ石スエ」という注記がある。実際にこれまで確認された門跡でも、古地図上に「門ノ石スエ」・「門石スエ」と記され合致していることから、ここも門跡の可能性が高い。

『大宰府市史 環境資料編』で製作されたこの部分の書き起こし図を幾何補正して、大野城のレーザー計測図に重ねたのが図8である。現地を踏査したところ、城門と思われる石積遺構と門礎石を新しく発見することができた(図9)。

今後の大野城などの古代山城の調査にこうした成果を活かすことで、新しい研究の基盤を作り上げたいと考えている。

3. 今後の進展

現在、古代山城データベース(テキスト・写真等の属性データ)に加えて、本研究で得た空間情報をWEB上で公開するための閲覧ビューワの開発に着手した。GPS機器を使うと、現地での遺跡位置を確認することも可能である。今後はiPadなどGPS搭載のタブレット機器を用いて、山城の保存管理や多くの人が山城踏査するさいのナビゲーターなど、幅広い分野で活用が期待される。

4. GISと古代山城に関する共同研究

九州国立博物館アジア文化交流センターでは、中日本航空株式会社に業務委託し共同研究として、古代山城跡と関連地形の既存の航空測量データを用いたパーソナルコンピュータやタブレット端末上での視覚的に有意な表示方法の開発、および成果の公開を行うためのWebGISやアナグリフ画像、立体模型などの製作を行った。ここにGISと関わる共同研究について成果の概要を記したい。なお、業務の委託は平成24年度に行った。

研究目的 今後航空レーザーはドローンを活用した計測等さまざまな場面で実施されることが予想される。しかしながら、統一的な視覚表示もなく、仮に地方自治体の文化財担当部局が古墳等のレーザー計測を委託し、その成果物を受領してもどのように活用していいのかわからないのが現状である。

本来はデジタルデータであり、さまざまな分析が可能であるし、一般市民向けの動画や3Dイラストなどの作成も容易である。こうした活用方法を公開することで、自治体等がレーザー計測を実施する仕様書にこうした成果物も記入されれば、データの有益な活用がなされと考えられる。

九州国立博物館アジア文化交流センターが蓄積した古代山城跡の航空測量データ(1mDEM:福岡

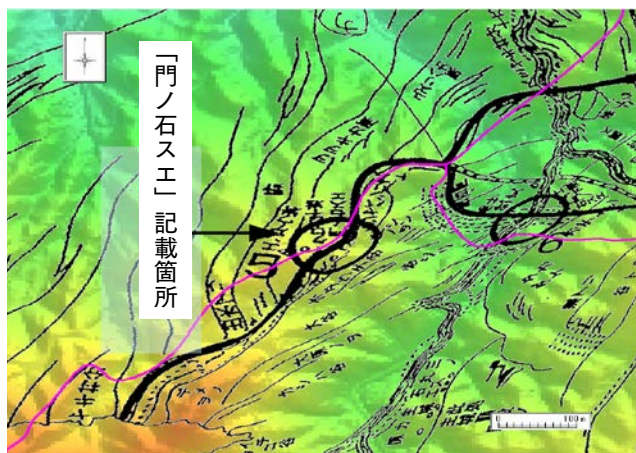


図8 古地図との重ね合わせ
古地図をレーザー計測地形データに重ね合わせた。



図9 新しく発見した城門(クロガネ岩城門)



図10 佐賀県・福岡県基肄城

県特別史跡大野城跡、福岡平野～大宰府地域、50cm DEM：佐賀県特別史跡基肄城跡、福岡県史跡高良山神龍石山城、福岡県阿志岐山城、山口県石城山神籠石山城）を活用し、上記の研究を実施した。

研究概要 ①上記の各山城跡やそれぞれを相関して、パーソナルコンピュータやタブレット端末上での視覚的に有意な表示ができるように加工を行う。表示に関してはGIS（地理情報システム）上で以下のデータの重畳やリンクが可能なものとした。

- ・航空レーザによるDEMデータ
- ・航空写真データ
- ・携帯GPS機器による測量データ
- ・古地図（※古地図に関しては、スキャナで読み取り正規化作業を行うものとする。）

②作成された成果を一般に公開するための以下の各種手法について、これを製作する。成果に関しては、将来的に九州国立博物館のホームページや関係施設において公開を行うことが可能なものとする。

- ・GISデータ
- ・動画コンテンツ
- ・立体視画像
- ・立体模型

上記の研究概要に従って、以下の作業を実施した。

(1) 立体地形解析図の制作

九州国立博物館アジア文化交流センターでも、航空レーザーの計測データにより、詳細な地形データが得られているが、それらを図面や画面などの平面で、地形の詳細な立体形状を把握するには、微地形をわかりやすく表現するための地形解析手法が必要となる。

立体地形解析図作成は、地形モデル (DEM) データから立体視画像データを作成し、出力紙やパソコン画面で閲覧できるようにしたものである。これらは、土塁線や遺構などの地形解析や眺望解析も直接適用されるものであり、種々の新知見の発掘が期待できる。

これらの解析図の作成手法として、いくつかの方法が提案されているが、今回は、立体斜度図、PEAKIT図及び地形起伏図による画像を作成した。

本研究では、大野城及び基肄城を対象として作成した。用いたデータは航空レーザ計測で得られた地形モデル (DEM) を用いており、大野城は1 mメッシュ、基肄城は0.5 mメッシュである。

このため、1 mメッシュの大野城は基肄城と比べると、地形表現の詳細さがやや劣っており、地形判読や解析を行う際には注意が必要である。

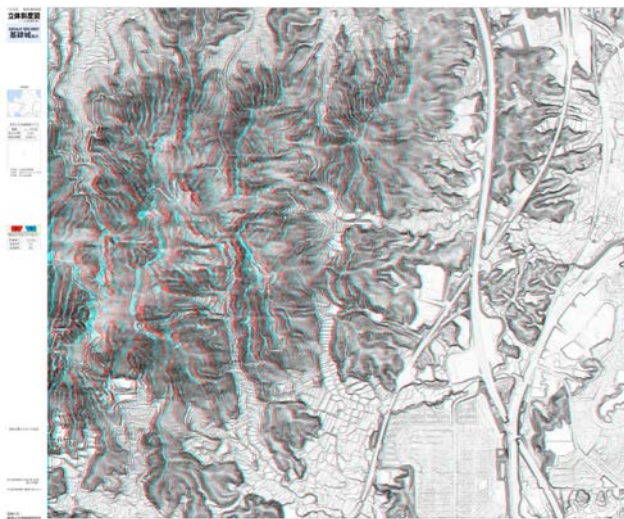


図13 立体斜度図 基肄城

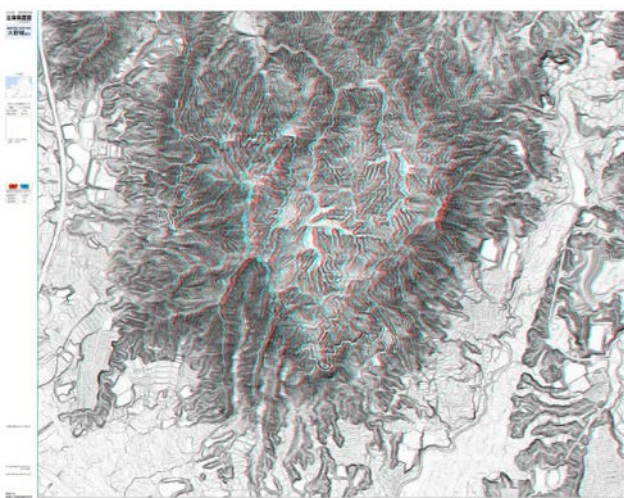


図14 立体斜度図 大野城

①立体斜度図 立体斜度図は、数値標高モデル

から作成した斜度 (地表傾斜角) 図をアナグリフ画像としたものである。垂直倍率 (距離縮尺に対する標高縮尺の高倍率) が一定値となるようにして作成してあり、画像中のメガネの色の凡例に画像向き合わせて、赤青メガネで見ることで、立体画像が得られる。なお、作製した画像はGeoTIF形式でデジタルデータ化した。

②PEAKIT図 PEAKIT図は、遺構や遺物の表面の形状および特徴線を的確に記述するために、開発された作成法であり、標高段彩、尾根線、谷線、陰影の4種のテクスチャを重畳表示したものである。立体斜度図がメガネにより立体形状を把握できるのに対し、PEAKITは実際の立体視はできないが、メガネなしで地形の起伏を詳細に把握することが可能である。なお、作製した画像はGeoTIF形式でデジタルデータ化した。

③地形起伏図 地形解析図は、標高に応じた基本色 (低標高は緑、高標高は茶色) に、地形の起伏を二次色 (凹地形は寒色、凸地形は暖色) として加え、さらに斜面の勾配に応じた影をつけたものである。

土塁のような微細な地形変化を明瞭に表現することが可能であり、なおかつ標高の高低を地形標高に応じた色変化で示すことができるため、大規模な自然地形に土塁のような人工的地形変化が存在する古代山城等の遺跡の表現に適していると思われる。

今回は10 mメッシュデータによる福岡県周辺の広域と大野城、基肄城、阿志岐城の詳細DEMを用いた地形起伏図を作成した。



図15 PEAKIT図 基肄城



図16 PEAKIT図 大野城



図17 地形起伏図 基肄城

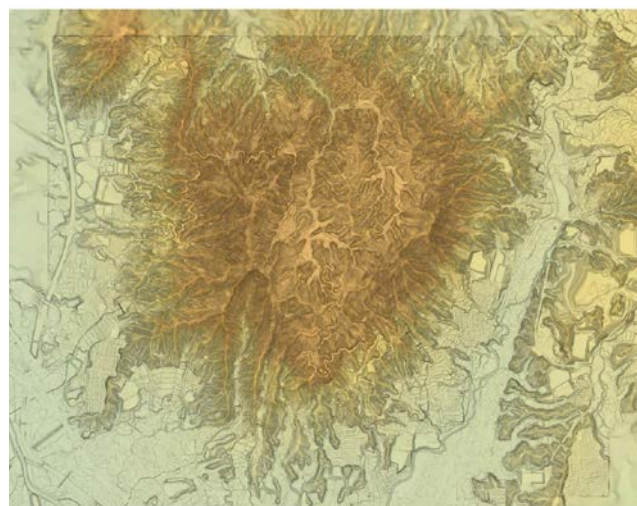


図18 地形起伏図 大野城

(2) 立体地形解析図による3次元的な空間把握と眺望分析

①ArcGISによる解析 ArcGISを用いて3次元的な空間把握と眺望分析を行う方法を検討し、その手順をまとめた。検討は、まず、広域の把握を目的とした国土地理院の10mメッシュデータによる地形解析及び眺望分析をおこない、多様な解析が可能かことを確認した。

次に、航空レーザ計測データによる詳細な地形分析を試みたが、詳細データはデータ量が膨大となるため、通常のデータ処理ではメモリ不足となり、データを取り込みArcGIS形式に変換することが不可能であった。そこで、データ入力方法を検討し別の方法でArcGIS形式データを得た。これにより詳細DEMデータによる解析が可能になった。



図19 地形起伏図 阿志岐城

②古地図の変換 古地図は重要な情報が含まれていることが多いが、紙ベースであることや、縮尺や位置情報があいまいであること等から、GISデータとしてすぐに用いることが困難である。そこで、古地図をスキャンしてデジタルデータ化し、さらに、古地図に記載されている、位置情報を利用して現在の地形図に重ね合わせ可能なように画像の変換を行った。

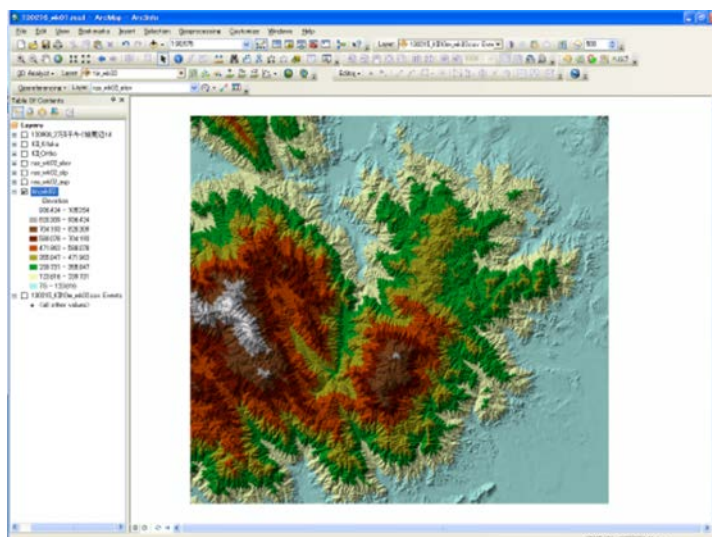
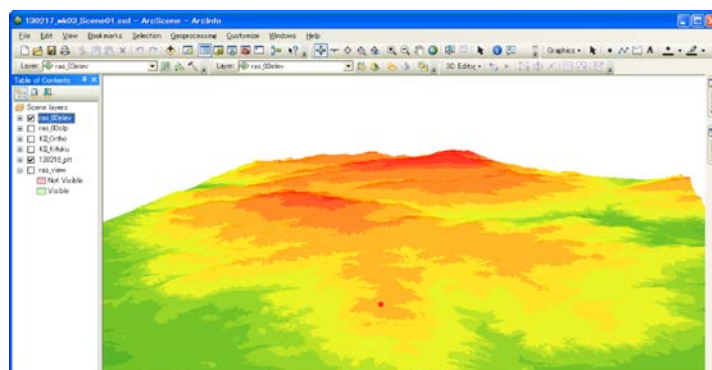
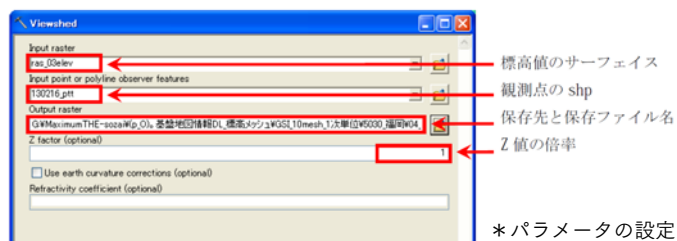
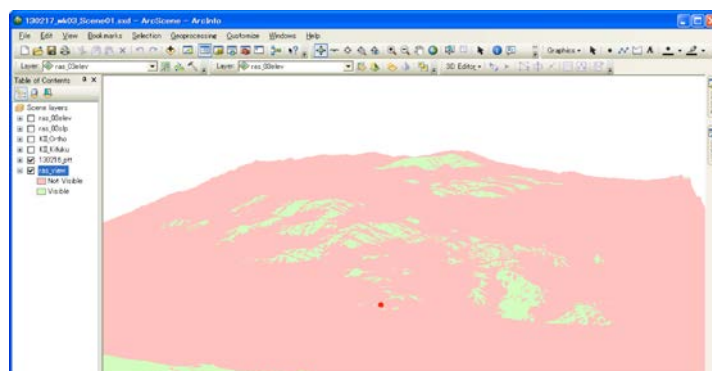


図20 10mメッシュデータをArcGISに取り込み
標高で色付けし表示した例



* 標高データ



* 眺望可能範囲（薄緑：眺望可能／薄桃：眺望不可）

図21 ArcSceneによる眺望分析の例

* ArcSceneの機能でパラメータを設定(図上段)すると、標高データ(図中段)から、視点(図中段/下段の中央赤い点)から眺望可能な領域が計算され表示できる。

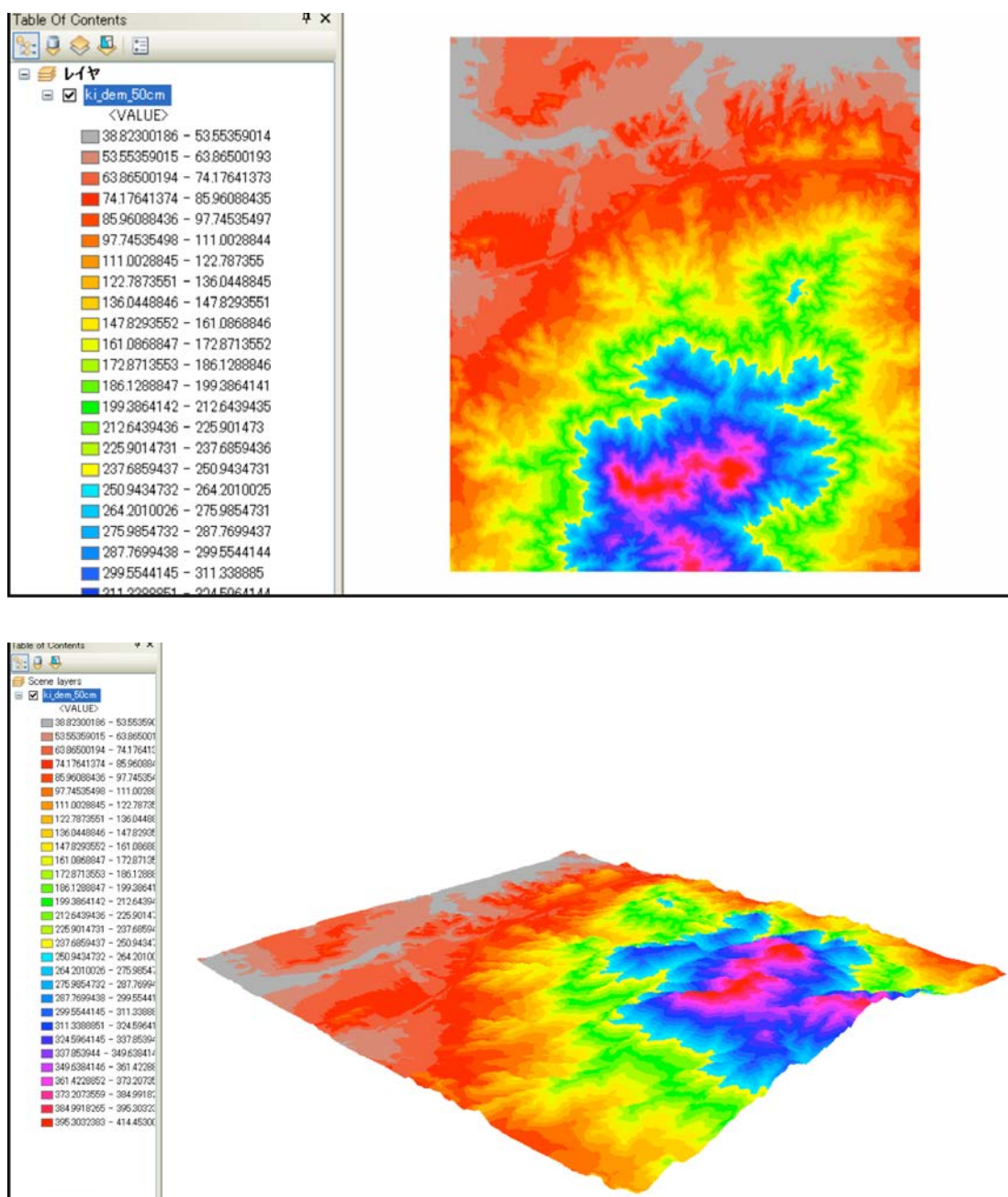


図22 詳細DEMの解析

*50cmの詳細DEMからArcGIS形式（ラスタ）を作成しArcGISで読み込んだ事例

本研究は九州国立博物館アジア文化交流センターの古代山城アーカイブ作成事業予算と、科学研究費（基盤研究B）「GISを活用した古代山城の研究基盤の創設」（研究代表者 赤司善彦 平成21～23年度）の研究成果の一部である。

また挿図の一部は中日本航空株式会社の提供を受けた。

参考文献

赤司善彦 2010「GISの古代山城研究への活用」『GIS NEXT』第30号 ネクストパブリッシング

赤司善彦 2010「大野城をGISで読み解く」『地図中心』450号 財団法人日本地図センター

赤司善彦 2010「古代山城の景観 数値標高モデルからの眺め」『地図中心』453号 財団法人日本地図センター

赤司善彦 2011「レーザー計測による古代山城の研究－基肄城をめぐる土塁の詳細－」『西日本文化』

赤司善彦 2018「古代山城とGIS－大野城・基肄城・阿志岐山城の眺望を中心に－」『大宰府の研究』古志書院



図23 画像変換後の古地図（基肄城周辺）

* 基肄城を中心として地形図に位置が合うように変換してある。このため、基肄城周辺ではよく一致するが、その他の地図の外縁部分は大きくひずんでいる。

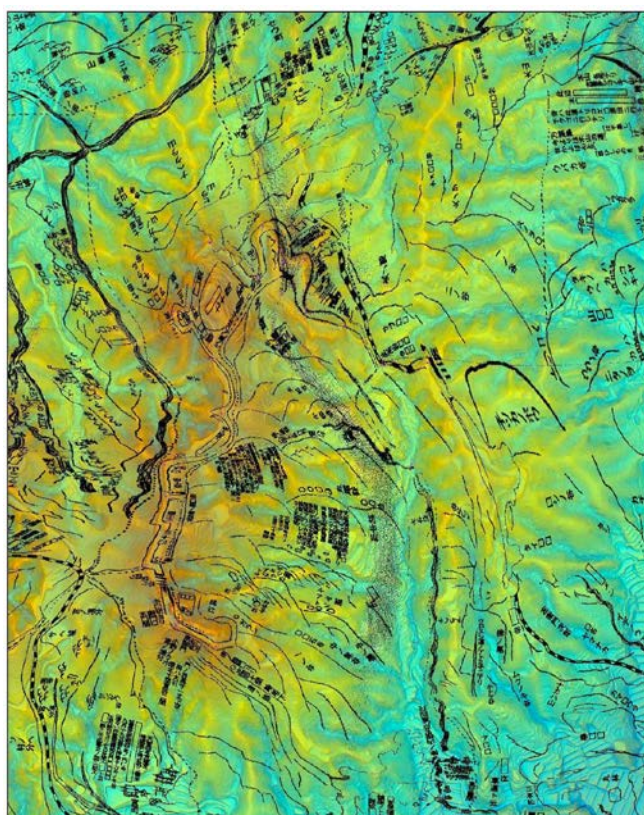


図24 古地図と詳細DEMの重ね合わせ（基肄城周辺）

* 古地図と地形が概ね一致しているのがわかる。

第2章

大野城の研究成果

赤司 善彦

はじめに

大河ドラマ『真田丸』では信長の安土城など数多くの城を舞台にストーリーは展開される。応仁の乱（1467年）から一世紀半、徳川幕府が誕生するまでを戦国時代と呼ぶ。この時代、戦国大名は乱世を生き抜くために競って城を築いた。全国で作られた城は5万以上とみられる。村に一つというほどの数で世界史的にも類を見ない数字である。この攻防の戦の中で生み出されたさまざまな城は、江戸時代になると、幕藩体制のもとで都市や集落などの城下町を抱えた城に統一された。

多くの日本人は、そびえ立つ天守閣や櫓、さらには曲線が美しい石垣と、これを映し水を満々と湛えたお堀が大好きである。江戸時代のお城はその美において日本のお城の到達点である。

こうした中世から近世へと受け継がれたお城が、今回のテーマである古代山城に繋がっているかという点、そこには全く歴史的な連続性はない。こちらは飛鳥時代から奈良時代にかけて、西日本の九州北部と瀬戸内一帯に築造され、音も「き」と読まれた。軍事的な緊張の中で誕生した城は、その必要性が薄れると忘れ去られる宿命をもっている。つまり、中国や朝鮮半島で発達した城が一度は古代に日本へと伝わったもののすぐに廃れてしまい、中世になって国内の覇権争いの激化で再度誕生したのである。

古代山城の築城主体も目的も、中世・近世の城とは異なっている。古代山城の場合は国外の敵が対象となって築城されたと考えられている。ただし、この考え方も近年の発掘調査の成果によって、別の視点での見方がされるようになってきた。新しい知見を交えて今日の時点での課題（謎）を紹介したい。

1. 古代山城の築城

古代山城は、東アジアの緊迫する情勢を背景に、ヤマト王権によって外敵の侵入を防ぐ目的で築城された。弥生時代や古墳時代には存在しない。その系譜については、中国で形成されその後、山岳地形に富んだ朝鮮半島で発達した山城の築城技術に求められ、7世紀代に我が国へもたらされたものである。

今から1350年前の7世紀、朝鮮半島では百済・新羅・高句麗による領土争いが激化し、ついには中国（隋・唐）までも介入しはじめることとなった。そして660年に百済が滅亡すると、日本はただちに百済救援のための大軍を送った。しかし、朝鮮半島西部の白村江で唐の水軍に壊滅させられてしまった。これが663年の白村江の戦いである。この敗北によって、日本は唐と新羅を敵に回してしまい外交関係は完全に破綻したかにみえた。さらに668年には北の高句麗も滅亡してしまう。

実は白村江での敗戦後、唐や朝鮮半島の諸国から日本へ使節の派遣があいつぎ、直接的な唐・新羅に対する脅威は一見なくなったようにもみえるが、日本の唐と新羅に対する警戒心は決して解かれず、さらに守りを強固にしようとしたと考えられる。

『日本書紀』によれば、敗戦の翌年に、対馬・壱岐両島と北部九州の沿岸部を中心に防人と烽（とぶひ）を配置し、同時に九州北部の筑紫に水城を築造。翌年には瀬戸内への関門である長門と、筑紫に大野城・椽（基肄）城と、さらに2年後には近畿の高安城と瀬戸内の屋嶋城さらには最前線の対馬に金田城を築いたと記す。戦略としては、まず防人による海浜警備と、通信網となる烽火の体制を整えたのである。次に大宰府地域に内陸の防衛拠点を形成して、さらには対馬から瀬戸内そして畿内の王都に至るまでの陸路・海路の主要幹線に多重防御線を敷いたと解釈できる。この天智朝期に仮想敵国の侵攻を防

ぐための国防策が矢継ぎ早に実施され、まだ白村江海戦での大敗の傷が癒えないまま、九州北部は防衛の最前線に立たされることになったのである。

日本が世界に向かって「日本」の国号を宣言し、天皇中心の中央集権国家としてアジア世界に躍り出たのは、ちょうどこの古代山城が築かれた直後のことである。まさに古代山城は日本の古代国家成立期を物語る歴史的記念物である。

2. 大野城の歴史的な評価と課題（謎）

古代山城の教科書ともいえるのが大野城である。東アジアでも最大規模を誇る。これまでの調査で城壁や内部に様子が調査され古代山城の中で最も解明が進んでいる山城である。山城が築かれたのは、標高410mの四王寺山である。山頂に登ると北は博多湾、南は天候に恵まれると有明海まで見通せる。四王寺山が通常の山容と違うのは、北側へと開口する谷を取り込んでいるため、外側は急峻だが内側はすり鉢状をなしている点である。

城壁 外郭線は自然の地形を利用しながら土塁を巡らせている。その土塁の総延長は6.5km以上である。この外郭の土塁線は日本では最大規模で、朝鮮半島の百済にもこのような大きな山城は築かれていない。百済滅亡後、新羅でも大規模化と高所化がなされているので、その築城設計の変化が反映されたのと考えられる。

さて、城壁は基礎部分の盛土とその上部に版築による硬く締まった強固な土塁を築くことを基本としている。近年の調査でこれが版築工法で築かれたことが明らかになった。しかし、城壁線がすべて確定しているかという点、実はそうではない。特に南北2重の土塁線が想定されているが、北側については門が設置された内側はともかく、外側土塁がすべてに圍繞されていたかどうかは異論がある。また、山城は険しい自然地形を効果的に利用して防御を施すことが特徴であり、土塁の有無の把握が難しい面がある。

城壁線が谷筋を通過する場合には、石垣を用いている。これまでに北側で百間石垣・北石垣・小石垣・屯水石垣、南側で水ノ手石垣・大石垣・原石垣の7カ所が確認されている。これらは内部まで石築された石塁（総石垣）と土塁の法面（表面）のみを石垣で構築して内部は築土からなる貼石垣がある。大野城の場合、存続期間が長いので当然すべてが初築の石積みとは限らない。谷部は総石垣で、丘陵部には土塁版築の外側のみ石積みした貼石垣がある。集水の様相の違いによって内部は異なる。長さ約180mで、古代の尺度に直すと大尺500尺の完数尺が想定できる。城塁の施工が一定の尺度を基本として設計されていることの検証は、今後の調査の課題である。なお、この百間石垣も積み直しを考慮しておく必要がある、

城門 城の内外に通じる城門は、2005年以降に新たな城門遺構が4ヶ所も発見されている。その結果北半の土塁で4ヶ所、南半に5ヶ所の計9ヶ所の城門が判明している。大野城の正門にあたる宇美口城門は、門礎の一部が保存されているだけで、詳細は不明である。

城門には門扉の軸や方立などを受ける仕口を造り出した唐居敷が付属しているが、これにより掘立式と礎石式があることが知られる。礎石の場合は唐居敷を一石でつくる事例が多い。柱には円柱と角柱が用いられている。さらに門扉の軸受孔の平面形が円形と隅丸方形そして方形の三種がある。形式的には大野城の水城口城門が最古期で、掘立柱式で円柱、そして軸受孔は円形である。保存されている宇美口城門の唐居敷は比較的新しい形式であり、建て替えられた可能性も考えられる。

また、門の床面は、防御性を重視して急峻な段差を設けた懸門（けんもん）式と呼ぶ北石垣城門、段差のない形式平門式の太宰府口城門のほか、床面の石敷に階段を設けた観世音寺口城門がある。大野城では掘立柱式の懸門式から礎石式の平門式へと変化している。軍事的な実用性の重視から荘厳する方向に変化したといえよう。それにしても城門は最も防御を固める必要がある施設である。なぜこれほどの

数の城門を築いたのか謎である。

築城年代 太宰府口城門第Ⅰ期に用いられたコウヤマキの木柱が残存していた。「孚石部(うきいしべ)」もしくは「孚石都」と読まれる文字が刻まれていることが明らかになった。都は津の意味で港である。和歌山に浮石津の地名が残る。また年輪年代測定法で検討したところ、650年の伐採であることが判明した。『日本書紀』には665年に築くとあることから、この年を築城完成年とすると、15年前に築城準備がされていたことになる。しかも、コウヤマキの年輪の変動パターンが平城宮出土のコウヤマキと合致していることから、和歌山などの近畿地方で伐採されそれが九州まで運ばれた可能性がある。

役割の変化 城内には各所で礎石建物跡の礎石を見つけられる。高床倉庫がそのほとんどを占めている。その構造や炭化米が大量に出土することからみて、稲穀を収納していたとみられる。50棟を超える倉庫は7世紀後半から9世紀にかけて、幾度か拡大していった姿である。

こうした倉庫のあり方は古代の国・郡に設置された稲の備蓄倉庫と構造や規模がよく似ている。大野城に蓄得られた膨大な稲穀は、海外との戦への備えだけではなく、災害や疫病などの非常事態に対応する財源を大宰府が独自に確保しようとしていたのではないだろうか。奈良時代に入ると外交が安定したことで、ほとんどの古代山城が廃絶させられるが、大野城や基肄城の場合には大宰府の管轄下にあり、九州地域の安定化のための備蓄基地という役割もあり長期に存続したのではないだろうか。

これは太宰府口城門の建て替えからもその変化が指摘できる。築城時のⅠ期は掘立柱建物で間口が5m以上と他の城門と比較して広いのが特徴的である。奈良時代前半にⅡ期の建物に立て替えられる。屋根が重層になる門で宰府政庁と同じ鬼瓦が用いられている。軍事的というよりは権威の象徴というような性格に変化しているようである。

立地と分布 大野城は、水城や基肄城とともに奈良時代に成立した大宰府の周囲にされている。東側の阿志岐山城の配置を含めると、百済の最後の王都扶余との類似が指摘されている。扶余の東羅城と名づけられた外郭城堡はその低湿地の工法が水城の敷粗梁(しきそだ)工法と同じであり、古代の幹線に関門を設けた防塁を築く発想は受け継がれていると思われる。

また、新羅の王都慶州にもよく似ている。王都である慶州の地は盆地状の地勢にあって、羅城はなく周囲の三山(明活山・南山・仙桃山)の山頂に山城を設け、さらにその外側に外城を築いて王都を防御している。大宰府の場合も敵の侵入が想定される博多湾側には、地峡を遮断する関門城としての水城や小水城を配するが、それ以外に大宰府を囲む土塁等の明確な防塁は確認されておらず、大宰府に羅城が存在したのかは不明である。

3. 神仏が護る四王寺山

大野城が築かれて約100年後の宝亀5年(774)大野城の城内に四天王寺が建立された。寺院を設置した目的は、新羅が日本を呪詛しているとの情報がもたらされたことから、これに対抗するため新羅に面した高く清らかな地に四天王像を祀って、その加護のもと金光明最勝王經の力と併せて新羅の災いを払い国家安寧をはかったのである。現在では信じられないかもしれないが、当時は観念の力こそが真の力と信じられていたのである。

四王寺山には北西の最も高い場所に毘沙門天、東に持国天、南に増長天、このやや西寄りに広目天の地名が残っているが、実際には四天王寺の一個所に四天王像を揃えて安置していたと考えられる。史料には「大野城鼓峰」と記されている。博多湾を望む最高所にあたり、毘沙門天の地名が残る。これまでの調査で礎石建物跡や水晶製の軸端や瓦などが発見されているが四天王寺の威容を伝える寺院跡は発見されていない。現在、毘沙門堂では、正月3日の「四王寺毘沙門詣り」が宇美町四王寺地区の人々によって守り伝えられている。

ところで四天王寺では四名の僧によって精進・修行が行われ、毎日昼は金光明經を讀経し、夜は神呪

を唱え続けたという。四天王寺は、観世音寺と同じく大宰府の官寺に位置づけられた。ただし、延暦20年（801）には四天王寺で四天王法が停止され、仏像も筑前国分寺に移された。新羅の直接の脅威が去ったという認識があったようである。しかし、807年になると大宰府管内で疫病が流行り百姓も疲弊している状況にあることから四天王寺の再興が大宰府より申請許可されている。

このように、大野城という軍事力だけではなく、神仏という精神的な力を合わせて国を護ろうとした当時の考え方がみてとれる。

おわりに

大野城の特徴をおさらいすると、規模が大きく山の高いところに築城され、城門や倉庫がたくさん築かれている。また、使用された期間が長い。ただし実戦に使用されたことがない。平和の象徴ともいえる。さて、多くの遺跡が土取りなどで破壊されているが、大野城はなぜ現在まで残されているのか。それはこれまでの1350年間大切だと認識されていたに他ならない。聖地として、地域の誇りとして今後も多くの皆さんに愛されることを願っています。

第3章

糟屋屯倉と怡土城からみた大野城

重藤 輝行

はじめに

大野城は古代山城の中でも最大規模のもので、その築造過程や役割を理解するには、東アジア情勢を含む広い歴史的脈絡から考える必要がある。ここではその試みのひとつとして、大野城築城から1世紀後の古代山城である怡土城と大野城の対比と相互の関連、大野城に先行する6世紀の糟屋の古代遺跡や渡来人のあり方をみて、大野城をその前後の時代の脈絡の中に位置づけてみたい。

1. 怡土城の築城からみた大野城跡

怡土城の概要 大野城、基肄城築城から約1世紀後、同程度の規模を誇る山城、怡土城が福岡県糸島市の東部、高祖山の西斜面に築城される(表1・図1)(瓜生編2006)。山の尾根線を走る城壁線上には8ヶ所の望楼跡、山裾には南北約2kmにわたる土塁があり、全周は6.5kmほどになる。構造上は大野城跡のような朝鮮式山城とは異なり、中国式山城との関連が指摘されている(鏡山1937)。

表1 古代山城一覧(磯村2010を基礎に作成)

	名称	所在地	旧国名	全周	遺構など
1	高安城跡	奈良県生駒郡平群町ほか	大和	不詳	倉庫建物跡
2	屋島城跡	香川県高松市	讃岐	7.2km	石塁・水門跡(1)
3	大野城跡	福岡県糟屋郡宇美町・太宰府市・大野城市	筑前	8.0km	倉庫建物跡・石塁・城門跡(9)・水門跡(1)・土塁
4	基肄(椽)城	佐賀県三養基郡基山町・福岡県筑紫野市	肥前	4.4km	倉庫建物跡・石塁・城門跡(3)
5	金田城跡	長崎県津島市	対馬	2.8km	石塁・水門跡(3)城門跡(3)
6	鞠智城跡	熊本県山鹿市・菊池市	肥後	3.6km	倉庫等建物跡・城門跡(3)・土塁
7	長門城跡	山口県下関市?	長門		所在地未確認
8	茨城城跡	広島県福山市	備後		未調査
9	常城城跡	広島県福山市	備後		未調査
10	大廻・小廻山城跡	岡山県岡山市	備前	3.2km	列石・石塁・水門跡(3)・土塁
11	鬼城山	岡山県総社市	備中	2.8km	石塁・列石・水門跡(5)・城門跡(3)・建物跡
12	城山	香川県坂出市ほか	讃岐	7.6km	土塁・建物礎石・石塁
13	永納山城跡	愛媛県西条市・今治市	伊予	2.7km	列石・土塁
14	石城山神籠石	山口県光市	周防	2.5km	列石・土塁・水門跡・城門跡
15	御所ヶ谷神籠石	福岡県行橋市・京都郡みやこ町	豊前	2.8km	列石・土塁・水門跡(1)・城門跡(6)・建物跡
16	鹿毛馬神籠石	福岡県飯塚市	筑前	2.0km	列石・土塁・水門跡(1)
17	雷山神籠石	福岡県糸島市	筑前	2.6km	列石・土塁・水門跡(2)
18	杷木神籠石	福岡県朝倉市	筑前	2.4km	列石・土塁・水門跡(2)
19	高良山神籠石	福岡県久留米市	筑後	2.7km	列石・土塁・水門跡(2?)
20	女山神籠石	福岡県みやま市	筑後	3.0km	列石・土塁・水門跡(4)
21	帯隈山神籠石	佐賀県佐賀市・神埼市	肥前	2.5km	列石・土塁・水門跡(4)・城門跡(1)
22	おつぼ山神籠石	佐賀県武雄市	肥前	1.8km	列石・土塁・水門跡(4)・城門跡(2)
23	唐原山城跡	福岡県築上郡上毛町	豊前	1.7km	列石・土塁・水門跡(3)・城門跡(1)
24	阿志岐山城跡	福岡県筑紫野市	筑前		列石・土塁・水門跡(3)
25	城山城跡	兵庫県たつの市	播磨	3.5km	石塁・城門礎石跡
26	三野城跡	福岡県福岡市か?	筑前?		所在地未確認
27	稲積城跡	福岡県糸島市か?	筑前?		所在地未確認
28	怡土城跡	福岡県糸島市	筑前	6.5km	土塁・石塁・城門跡(3)・望楼跡・建物跡

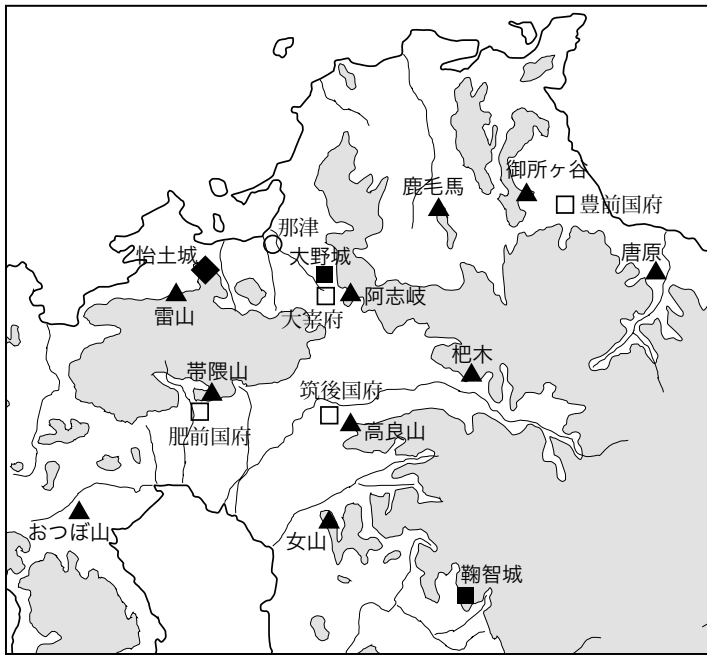


図1 北部九州の古代山城分布図（山中編2004を基礎に作成）

怡土城は天平勝宝8年（756）に着工され、神護景曇2年（768）に完成したと記録される。大規模な山城の築城に要する期間を知ることができ、大野城跡もその程度の期間を要するのではないかと考えられる。また、その築城には2度の遣唐使として著名で、奈良時代の政治史上でも大きな活躍を果たした吉備真備が指揮したことが記録されている。

吉備真備と怡土城 ここで少し、吉備真備の生涯を見てみることにしたい（宮田1961）。吉備真備は1回目の遣唐使として、中国に19年間滞在し、帰国後、中央政界で官人、政治家として順調に位を高め、天平19年（747）には平城京の長官、右京大夫にまで出世する。ところが、その後、同時期の政治家、藤原仲麻呂により左遷されることとなる。

左遷後、天平勝宝2年（750）筑前国司、肥前国司を経て、天平勝宝3年（751）に遣唐副使となり、2回目の遣唐使として翌年、入唐し、2年後に鑑真とともに帰国する。そして、帰国後は大宰大式として、天平宝字8年（764）、造東大寺長官に異動するまで、怡土城築城を指揮することになる。

吉備真備の構想 怡土城の築城は、中国の安史の乱（755～763年）および新羅との関係悪化に応じた防衛体制の整備の一環とされる。ただ、吉備真備は筑前・肥前国司時代に築城から90年ほど経過した大野城、基肄城の状況を熟知していたと考えられる。中国で学んだ築城技術に加えて、国司時代の経験が怡土城の占地や設計、さらには築城のための労働力、資材の確保、工程の把握など様々な面で、活かされたと推測される。安史の乱、新羅との関係悪化に先立ち、740年代より新羅は疫病等で政情が不安定であったと記録されている。吉備真備は筑前・肥前国司の時期から新たな築城を構想し、そのために2度目の遣唐使としての入朝に望んだことも想像される。

怡土城築城当時、大野城、基肄城は山城として機能しており、吉備真備は、新たに怡土城を設けることで、一体的な防衛を考えたのであろう。また、怡土城築城時の大野城、基肄城の役割を考えると、単に大宰府の北と南を固めるだけでなく、博多湾を意識した守りとしての大野城の役割が考えられる。怡土城が糸島半島、基肄城が有明海、そして大野城が博多湾から上陸する敵に備えるという構えである。

2. 糟屋と大野城

大野城築城と糟屋の渡来人 推測、想像の是非はさておき、怡土城築城に係る吉備真備の動向から大規模な古代山城の築城に要する期間の長さを知ることができる。また、古代山城の築城には山城構造、軍事的知識はもちろん、地域の労働力、資材の分布についての知識が必要であったと考えられる。そのような観点から大野城跡と糟屋郡との関わりを考えていくことにしたい。

周知のように大野城、基肄城の築城には百済からの渡来人、憶礼福留と四比福夫が指揮したとされる。ただ、労働、資材の提供等まで考えると築城には多くの人びとが関与したと考えられる。

大野城を築城した渡来人は、百済の滅亡に伴うものであるが、5世紀後半以降、朝鮮半島からの渡来人が多く日本に渡来し、とりわけ九州北部はその最初の上陸地であった。5世紀後半以降の朝鮮半島西

南部、馬韓・百済系土器の分布（図2）を見ると糟屋地域はその集中地域のひとつである。また、大野城市側では薬師の森遺跡でも出土する。したがって、大野城築城に200年先立つ時期から糟屋、大野城周辺には渡来人が集中していたと言える。7世紀においても、彼らが大野城築城にその様々な知識・技術を提供したと考えられる。なお、基肄城周辺も5世紀後半以降の馬韓・百済系土器の分布が集中する感があり、糟屋郡域と同様に渡来人の居住が考えられる。

糟屋屯倉から大野城へ 6世紀の糟屋郡には、筑紫君磐井の乱後の、継体天皇22年（528）に、糟屋屯倉が設置された。糟屋屯倉の設置は磐井の子、葛子が罪の赦しを乞うために献上したことが直接の理由であるが、屯倉はヤマト政権による領域的な支配とともに、軍事的な性格を持つとされる。

屯倉の軍事的性格については、屯倉に設けられた倉に軍隊が駐屯したという指摘がある（藺田1981）。また、桃崎祐輔氏は、屯倉と軍糧備蓄および地域への示威・威圧のための大型倉庫群の存在との関わりに注意している（桃崎2010）。近年、糟屋屯倉との関連が指摘される遺構が古賀市鹿部田淵遺跡、そして、粕屋町糟屋官衙遺跡群阿恵遺跡で発見されている。糟屋屯倉の場所はいずれかは確定していないが、いずれの遺跡でも大型の倉庫を伴い、示唆的である。また糟屋官衙遺跡群阿恵遺跡は7世紀後半には評家となった可能性が高く、大野城北の正門となる百間石垣から北へと向かう道上にも位置する。大野城築城期の物資、兵の集積地であった可能性も考慮する必要がある。

ところで、高句麗軍の侵攻による百済の王都漢城の陥落を記した『日本書紀』雄略20年（476）の条には、「爰有少許遺衆、聚居倉下、兵糧既尽、憂泣茲深」とあり、藺田香融氏は、倉の下が軍隊の駐屯に利用されていたとする（藺田1981）。倉の軍事的利用やその朝鮮半島との関わりを示すものとして注意され、大野城、基肄城の倉庫群の利用方法を考える材料になると考えられる。

大野城築城には亡命した百済人の指導が考えられるが、一方で、5世紀後半以降に朝鮮半島から渡来し、糟屋郡等大野城周辺に居住していた渡来人の参画が想定される。また、大野城築城には糟屋屯倉と連続する部分があったと考えられる。このような点から、大野城は大宰府の防衛という視点だけでなく、糟屋郡との関わりも重視すべきであることを確認しておきたい。

おわりに

大野城築城について本稿では築城に先立つ5～6世紀の渡来人の動向や屯倉の設置、築城から100年

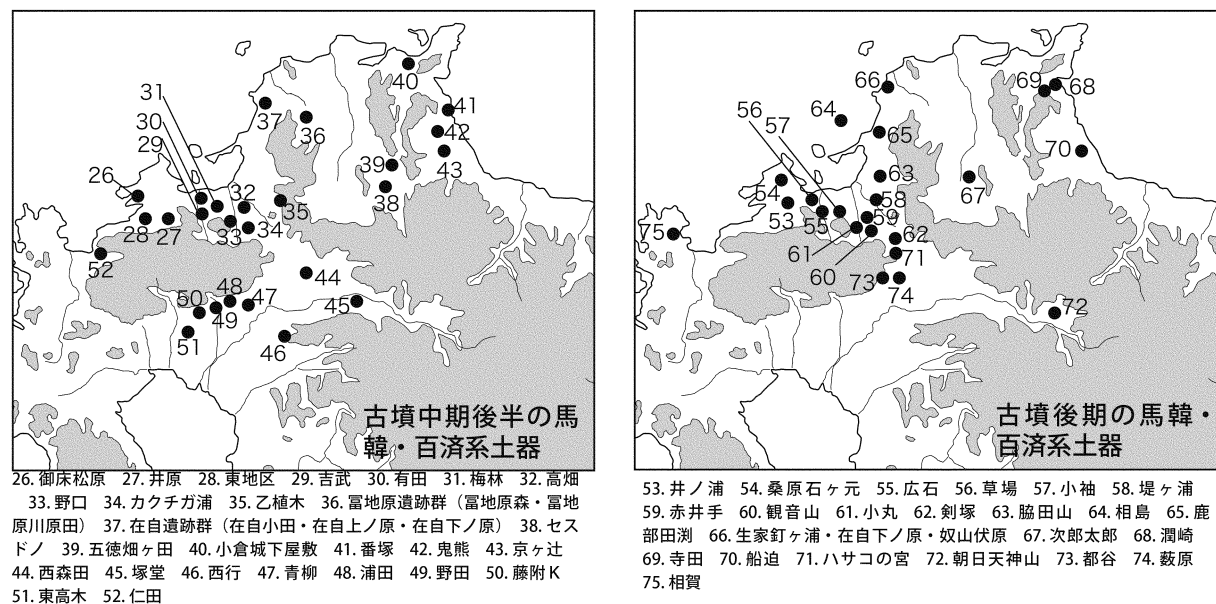


図2 古墳時代中期後半（5世紀後半）・後期（6世紀）の馬韓・百済系土器の分布

後の吉備真備による怡土城築城という二つの視点から考えてみた。大野城築城は7世紀の日本史上の画期となる出来事であるが、長期的な視点や大野城にかかわる人びとの動きを見ることにより、大野城の役割や築城の経緯に対する理解が深まるのではないかと考えられる。今後も、様々な視点から大野城跡をめぐる議論が展開されることを期待したい。

引用文献

磯村幸男2010「西日本の古代山城」森公章編『史跡で読む日本の歴史』吉川弘文館

瓜生秀文編2006『国指定史跡怡土城跡』前原市文化財調査報告書第94集

鏡山猛1937『怡土城址の調査』日本古文化研究所報告第6 日本古文化研究所

宮田俊彦1961『吉備真備』吉川弘文館

桃崎祐輔2010「北部九州の屯倉研究入門」『還暦、還暦？還暦！－武末純一先生還暦記念献呈論文集・研究集』武末純一先生還暦記念事業会

山中敏史編2004『古代の官衙遺跡』Ⅱ 遺物・遺跡編 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

第4章

文献史料からみた大野城

松川 博一

1. 大野城築造を語る史料

『日本書紀』には大野城の築造を示す記事がふたつ存在する。ひとつは白村江の敗戦の翌々年にあたる天智天皇4年(665)8月の築造記事である。

【史料1】秋八月に、達率答怱春初を遣して、城を長門国に築かしむ。達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣して、大野及び椽、二つの城を築かしむ。

もうひとつはそれから5年後の天智天皇9年(670)2月の記事である。

【史料2】又、高安城を修りて、穀と塩とを積む。又、長門に城一つ・筑紫に城二つを築く。

【史料2】の筑紫に築かれた二つの城とは、【史料1】から大野と椽の二つの城、つまり現在の大野城跡と基肄城跡のことを指すと考えられる。これを『日本書紀』編纂時の重出記事として取り上げない説がある一方、【史料2】を山城完成の記事として積極的に評価した上で『日本書紀』天智天皇10年正月条の答怱春初と憶礼福留に対する叙位をその功績への褒賞とする見方もある。

大野城の築造を考える上で重要な出土文字資料としては、大野城太宰府口城門跡出土の創建当初に使用された刻書木柱がある。刻書の内容については、第3文字目をめぐって「孚石部」とする氏族名説と「孚石都」とする津(港)名説の両説があり、前者については「孚石部」と読みの部を指すとする説も提示された。築造年代を考える上で重要となるのは木柱の伐採年であり、X線CTスキャナの画像に基づいた年輪年代測定法による調査の結果、白村江の敗戦前の650年前後との年代を得ている。この【史料1・2】と刻書木柱の伐採年代が大野城築造の謎に迫る大きな鍵となる。

この3つの史料の理解をめぐっては、大別すると①【史料2】を重出記事としてあくまで【史料1】に基づき665年を大野城の築造年とする説、②【史料1】を大野城の築造開始とし【史料2】を完成を意味するとする説、③刻書木柱の伐採年を重視し白村江の戦い以前から築造が始まっており【史料1】を完成記事とみる説がある。

その後、大野城が注目されるのは、天智天皇死後の天武天皇元年(672)に起きた壬申の乱の時である。筑紫大宰であった栗隈王は、大友皇子からの援軍要請に対して、「城を峻くし隍を深くして、海を臨みて守らするは」外敵から国を守るためだとして、内乱への派兵を断っている。「城」とは大野城をはじめとした筑紫の城、「隍」とは水城と考えて大きな間違いはないであろう。白村江の敗戦から約10年が経過してもなお、大野城や水城が対外防衛施設として強く意識され、筑紫大宰の下で維持管理されていたことがうかがわれる。

つづいて「大野城」が史料上で確認できるのは、文武天皇2年(698)5月の大野城・基肄城・鞠智城の修理を命じる記事である。

【史料3】大宰府をして大野・基肄・鞠智の三つの城を繕治はしむ。

筑前国の大野城、肥前国の基肄城、肥後国の鞠智城が大宰府の管理下で修築されていることがわかる。

2. 大野城と大野山・大城山

「大野城」という城名の由来は、大野の地名もしくは大野山の山名に求めることができる。「大野」の地名は筑前国御笠郡の郷名として大野郷がみえるほか、万葉筑紫歌壇が花開いた奈良時代、大宰大監大

伴百代の恋歌の中に「思はぬを 思ふと言はば 大野なる 三笠の社の 神し知らさむ」(巻4-561)とみえ、三笠の社(=御笠の森、現在の太宰府市山田)の所在地として「大野」の地名が確認できる。「大野山」については大宰帥として赴任した大伴旅人が妻を亡くし、その悲嘆を慮って筑前守の山上憶良が詠んだ「大野山 霧立ちわたる わが嘆く おきその風に 霧立ちわたる」(巻5-799)の万葉歌に「大野山」がみえる。「大野」と「大野山」が少なくとも奈良時代まで遡り得る名称であることは確かである。

さらには『元暦校本万葉集』の「いちしろく しぐれの雨は 降らなくに 大城の山は 色づきにけり」(巻10-2197)の和歌に付された「大城の山」の註には、「謂ふは筑前国御笠郡の大野山の頂にあり、号けて大城と曰ふ」とあり、大野山の頂を大城(山)と呼んだことがわかる。この内容は、『万葉集』の最古の注釈書『秘府本万葉集抄』(平安時代末期成立)が引く『筑前国風土記』の逸文にも同様の記載が確認でき、その認識は和銅年間(708～715)の風土記の編纂時まで遡ることは明らかである。大野山は大野城が築かれたことによって、『万葉集』に詠まれる「大城山」や延喜5年(905)の『観世音寺資財帳』にみえる「大野城山」という別称を持つことになったと考えられる。また、大宰府政庁前面の不丁地区の官衙跡からは、「大城」と墨書された土器が出土しており、「大野城」を意味すると思われる。大野山の頂が大野城を意味する「大城」と呼ばれたのにはしるべき理由があるはずであり、今後大野城の構造の解明を進めていく上で大野城の最高所にあたる「毘沙門天地区」は重要な地点である。

「大城山」の山名は『日本三代実録』貞観8年(866)2月14日条に「城山四王院」と記され、さらに「城山」と略称されている。なお、現在の「四王寺山」の山名は、宝亀5年(774)、大野城内に大宰府四天王寺(四王寺)が建立されることにより生まれた呼称である。これらを整理すれば、おおよ「大野山」→「大野城山」→「大城山」→「城山」→「四王寺山」という山名の移り変わりが想定される。

あわせて基肄城についても言及すると、『日本書紀』では「椽」の城として登場するが、『続日本紀』では「基肄城」、『万葉集』では「記夷城」と表記されている。当初、「椽」という地名・郡名だったものが、和銅6年(713)5月に国・郡・郷名に二字の好字を当てることとなり、「木国」が「紀伊国」となったように「椽郡」から「基肄郡」に改定されたと考えられる。この時に編纂された『肥前国風土記』では、これにしたがい郡名を「基肄郡」、山名を「基肄之山」と表記している。

3. 大野城の倉庫の中身

古代の「クラ」の用字には、大きく「倉」と「庫」で使い分けがあった。「倉」は穀稲・穀稲(粃米)・粟を納めるクラ、「庫」は武器・文書・書籍・布帛・宝物を納めるクラを指した。大宰府でいえば、大宰府管下の六国(筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後)から貢進された稲穀を納めたクラを「税倉(税庫)」といい、西海道諸国(九州一円)から貢納された布や真綿などの調庸物のほか武器・文書・書籍などを納めたクラを「府庫」という。そして、「税倉(税庫)」は税司、「府庫」は蔵司が所管していた。「府庫」の中でも武器庫そのものを指す場合には特に区別をして「兵庫」と書かれる場合が多い。

大野城内にあった倉庫やその収納物について知ることができる史料は意外と少なく、いずれも平安時代以降のものである。大野城内の「クラ」は、大宰府政庁の周辺にあった「府庫」「税倉(税庫)」に対して、「城庫」と呼ばれていた。その「城庫」に納められていたものとして確認できるのは、貞観12年(870)5月2日太政官符にみえる「大野城器仗」と、同18年3月13日太政官符にみえる「大野城衛卒粮米」である。ただし、同12年以前には庸米や雑米の一部が収納されていた可能性も皆無とはいえない。

「器仗」とは実用(兵仗)と儀礼用(儀仗)の武器・武具のことを指し、ともに「兵庫」に納められていた。大宰府の「兵庫」は、大宰府政庁の近くの「府庫」と大野城内の「城庫」の二か所にあった。これらの兵庫は延暦18年(799)以降、不動とされ、原則として非常時と修理以外で開封されることは許されなかった。養老衛禁律には、兵庫や「筑紫城」へ不法侵入した際の罰則規定がある。

【史料6】凡そ兵庫の垣、及び筑紫の城を越えたらば、徒一年。陸奥・越後・出羽等の柵も亦同じ。

「筑紫城」とは、少なくとも大野城と基肄城の二城、あるいは【史料3】を踏まえれば鞠智城を含むと考えられる。兵庫の垣を越えることと山城の土塁・石垣を越えることが同じ罪に問われている。山城そのものが、警衛区域として兵庫と同格との認識があったことを意味する。もうひとつの「衛卒粮米」とは、大野城に配備され城の修理や日常の管理に当たった衛卒40人分の粮米のことであり、毎月24斛が支給された。大野城の収納物についての記述は以上であり、あとは他の山城の例から類推するしかない。

古代山城の収納物として確認できる初出例としては、大和国の高安城の例がある。『日本書紀』天智天皇8年冬条には「高安城を修りて、畿内の田税を収める」との記述がみえ、そのことは前掲の【史料2】の「穀と塩を積む」の記事からも確認できる。壬申の乱の時、高安城は大友皇子側（近江方）の軍事拠点のひとつであったが、城内の備蓄米が敵方に渡るのを恐れた大友皇子方は撤退するに際して税倉に火を放っている。この史料は、対外防衛の軍事拠点であった大野城でも同様に、有事の際に兵糧となりうる稲穀や塩を貯蔵していた可能性をうかがわせる。

大宰府政庁跡の前面に位置する不丁地区官衙跡から出土した木簡には、大宰府が基肄城に収納されている稲穀を「筑前・筑後・肥国等」の大宰府管内諸国に分ち与えたことを示す文書木簡がある。

【史料4】為班給筑前筑後肥等国遣基肄城稲穀随 大監正六上田中朝□ □ (264)・34・6 6011

（筑前・筑後・肥等の国に班給せんがために、基肄城の稲穀を遣わして、大監正六（位）上田中朝（名欠）に随はしむ）

稲穀が諸国に班給される理由として考えられるのは、疫病・災害・飢饉に際して稲穀を病人・高齢者・貧窮者らに支給する賑給である。木簡は不丁地区官衙跡の東限をなす境界溝（SD2340）から出土しており、8世紀前半のものと考えられている。田中朝臣については名を欠いているが、天平4年（732）に大宰少監として赴任した田中朝臣三上である可能性が高い。なお、三上は天平8年正月に正六位上から外従五位下へ昇進している。天平4年から7年の間で賑給を必要とした事態としては、天平7年の大宰府管内における疫病の流行が想起される。この時、疫病患者らに対して8月と閏11月の2回にわたり賑給が行われている。以上のことから、この木簡は古代山城に稲穀が貯蔵されていたことを明証するだけではなく、その稲穀が疫病への救済策に使用された可能性を示す貴重な史料といえる。

鞠智城の倉庫については、時代が下るものの『日本文徳天皇実録』天安2年（858）6月己酉条に以下の記事がある。

【史料5】又、肥後国菊池城院の兵庫の鼓 自ら鳴り、同城不動倉十一字火く

鞠智城内に兵庫のほか、不動倉が11棟以上あったことを示す。不動倉とは、正倉のうち、稲穀で満杯となり封印された非常備蓄用の倉のことをいい、郡ごとに置かれていた。その稲穀は不動倉といって賑給のような特別な場合を除き消費できないことになっていた。先述した基肄城の稲穀もまた、賑給であったとすれば、動用穀が不足すれば不動穀が充てられたであろう。基肄城や鞠智城と同様に大野城にも不動倉があり、有事の時はもとより疫病・災害・飢饉の際の備えとしていたと考えられる。

さらにいえば、大宰府は外交の窓口や対外防衛の拠点という特有の機能を有しており、疫病対策に止まらず、外国使節の応接や交易、対外国および対隼人などの軍事に関わる費用といった、優先すべき臨時的な支出が発生する可能性が他の地域や官司に比べて極めて高い。その万が一の備えとして、大野城をはじめとした管内の山城に不動倉を設け、大宰府の統轄下に置いたと考えられる。

4. 大野城を守った人々

大野城が防衛施設としての機能を果たすためには、それを守衛・維持するための兵員が必要である。城柵については基本的に所在国の国司が管理責任を負うことになっていた。したがって、軍団制下においては、国司の指揮の下で軍団兵士がその任に当たったと考えられる。西海道でいえば、大野城は筑前

国、基肄城は肥前国、鞠智城は肥後国の軍団兵士がそれぞれ上番して守衛していたことになる。しかしながら、大宰府が筑前国を兼帯していた時期には大宰府が大野城を直接所管していた。その場合、大野城の守衛は、筑前国だけではなく、府下六国（筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後）から大宰府へ上番していた軍団兵士によって編成された大宰府常備軍が担っていたと考えられる。兵士の役務は、城門や城庫などの守衛だけではなく、城隍^{じょうこう}の修繕もあった。修繕のための兵員が確保できない時には近隣の農民を人夫として徴発することも可能であった。大宰府と筑前国については、兼帯と別置を繰り返すが、大野城の管理については次第に大宰府が直接所管することが恒常化し、大宰府の官司内に大野城の管理を専当する主城^{しゅじょう}（大主城・少主城）や城司（大野城司）が置かれることになる。

天長3年（826）、西海道の軍団制が廃止され統領選士衛卒制^{とうりょうせんし}が施行されると、軍団兵士に替わり選士が兵員として守衛にあたることになる。大宰府の選士400人のうち何人が大野城に配備されたかは不明であるが、大宰府における守衛対象施設として大野城が兵庫となれば優先順位が高かったことを考えればそれに割く人員は少なくなかったと考えるべきであろう。あわせて衛卒についていえば大宰府の衛卒200人のうち、40人が大野城の修理をはじめとした日常的な維持管理のために常駐する規定となっていた。これをうけて城周辺の農民の中には、糧米を納める城庫の近くに居を構え衛卒らを相手に商売を行う者も現れた。彼らは万が一の際、臨時の兵員となることも期待されていたと考えられる。

最後に、大野城を語る上では、宝亀5年に新羅の呪詛へ対抗すべく建立された四天王寺（四王寺）の存在を忘れてはならない。同寺には四天王像の供養のために4人の僧が置かれ、昼は金光明最勝王經^{きんこうみょうさいしょうおう} 四天王護国品^{しんじゆ}を読み、夜は神呪^{しんぎ}を唱えることになっていた。四僧はあくまで修行のための要員であり、このほかに官寺としての施設と組織を維持していくために僧侶や俗人が住していたと考えられる。

参考文献

- 坂本太郎1964「天智紀の史料批判」『日本古代史の基礎的研究 上 文献編』吉川弘文館
- 平野邦雄1969「大宰府の徴税機構」『律令国家と貴族社会』吉川弘文館
- 平野邦雄1983「クラ（倉・庫・蔵）の研究—大宰府、郡家の発掘調査によせて—」『大宰府古文化論叢 上巻』吉川弘文館
- 横田義章1983「大野城の建物」『大宰府古文化論叢 下巻』吉川弘文館
- 渡辺晃宏1989「平安時代の不動穀」『史学雑誌』98-12
- 倉住靖彦1990「大野城司考」『古代中世史論集』吉川弘文館
- 杉原敏之2006「大野城出土柱根の刻書」『九州歴史資料館研究論集』31
- 鈴木拓也2010「軍制史からみた古代山城」『古代文化』6-14
- 鈴木拓也2010「文献史料からみた古代山城」『条里制・古代都市研究』26
- 磯村幸男2010「西日本の古代山城」森公章編『史跡で読む日本の歴史3 古代国家の形成』吉川弘文館
- 赤司善彦・光谷拓実2011「大野城の築城年代再考—大宰府口城門出土木柱の年輪年代の測定から—」『東風西声 九州国立博物館研究紀要』7
- 松川博一2012「大宰府軍制の特質と展開—大宰府常備軍を中心に—」『九州歴史資料館研究論集』37
- 八木充「大野城の門柱刻書について」『日本史研究』624
- 赤司善彦2014「古代山城の倉庫群の形成について—大野城を中心に—」『東アジア考古学論攷』2、中国書店
- 九州歴史資料館2015『特別展 四王寺山の1350年—大野城から祈りの山へ』
- 酒井芳司2017「大野城跡出土柱根刻書再考」『九州歴史資料館研究論集』42
- 松川博一2018「律令制下の大宰府と古代山城」『九州歴史資料館研究論集』43

第5章

大野城の土木技術

入佐 友一郎

はじめに

城壁総延長約8 km、城門9箇所、石垣6箇所、建物総数約70棟を確認・推定する大野城は、その歴史的背景のみならず、遺構の残存状況が大規模かつ良好に残されていることが評価されて「特別史跡」という国宝級の扱いを受けている。しかし、日本書紀・続日本紀などの文献史料からは、築造の時期（665年）、修築の時期（698年ほか）、築造の指揮官（憶良福留、四比福夫など百済からの亡命官人）など限定した情報しか得ることができず、城の構造、築造に用いられた技術、築造に要した年数、動員された労働者の数などに関しては、今なお不明な点が多い。

本発表では、これまで筆者がこれまで携わってきた大野城跡の復旧・復元事例の中で知り得た、古代の人々の多種多様な技や工夫などの「土木技術」を通して「大城（大野城）の謎」に迫っていきたい。

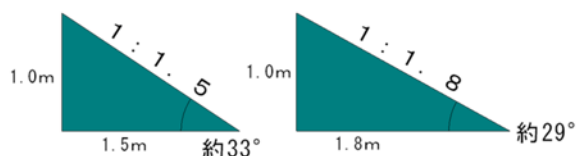
1. 〈古代の技術〉＝〈原始的な技術〉ではない！

研究者や歴史愛好家などの一部を除き、多くの人は大野城が築造された時代、つまり飛鳥時代の土木技術というものは極めて原始的と思っているだろう。しかし、水城や大野城の城壁などを「構造」つまり工学的視点から検証していくと、その技術レベルの高さは決して現代に劣っていないとの結論に至る。その理由について、土塁を例に説明していきたい。

城壁である土塁は、四王寺山脈の峰々を永延と廻っている。場所によってばらついているが、およその規格は、天端幅2～3 m、高さ5 m程度である。一般的に盛土という構造物は、その高さを上げていくと徐々に不安定化し、さらに高くしていくとやがて崩壊に至る。現代の土木工事では、この問題に対処するため、のり面の角度をおよそ 30° （勾配1:1.5～1:1.8）と緩くするように規定されている。では、城壁である土塁の角度はどの程度だったのか。バラつく傾向を見せるが、筆者の測定ではおよそ 55° ～ 60° （勾配1:0.5～1:0.7）であった。つまり、現代の安定基準の2倍にも迫る不安定な角度なのである。

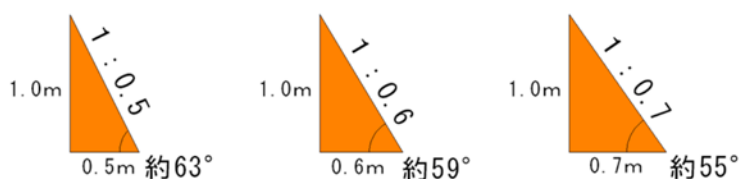
現代における盛土安定勾配（高さ5 m以内）

1 : 1.5 ~ 1.8



大野城跡における城壁（土塁）の勾配（高さ4～5 m）

1 : 0.5 ~ 0.7



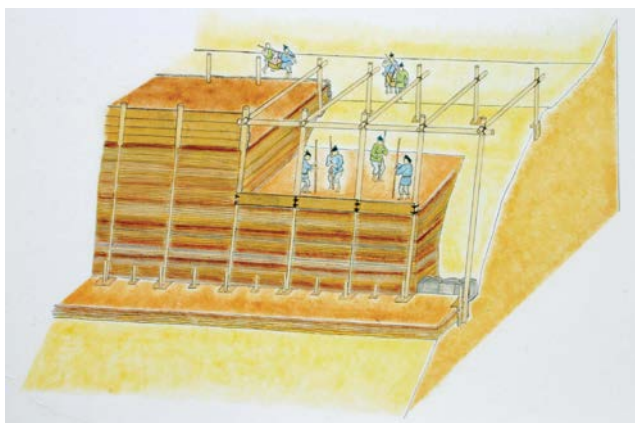
現代の安定勾配（上）と土塁の勾配（下）の比較

このように不安定と判断される構造物が、自然条件の厳しい山頂付近で、1300年以上も崩壊せずに残ってきたのはなぜか。それは、古代の土木技術が決して原始的、あるいは未熟なものではなく、大変優れていたからと言えるのである。

2. 版築と呼ばれる盛土技法に迫る！その1～1層当たりの厚さと施工方法を現代と比較する～

では、なぜ優れているのか？その答えが一般に「版築」と呼ばれる古代の盛土技法と知る人は多い。版築とは何か？その定義は、史跡御所ヶ谷神籠石で想定された右の復元図のように側方を板のようなもので固定し、その中に入れた土を棒などにより突き固める行為と言われる。よって〈縞模様又は互層〉＝〈版築〉は、定義に照らし合わせれば間違えとなる。では、大野城の土塁はこの定義のとおり版築で築かれたのか。小石垣近傍の土塁の発掘調査にて、実際に棒で突き固めたと思われる痕跡と、側方を固定するために必要な縦柱の痕跡の両者が検出された。また、縦柱の痕跡は他にも多くの地点で確認され、これらのことから大野城は版築という技法で築かれたと報告されている。

また、発掘調査の際に現れる土塁の断面を詳細に観察すると、盛土1層当たりの厚さは10～15cm程度であった。現代の盛土は一般的に30～50cm／層なので、およそ1/2～1/3の厚さでしかない。盛土の方法も、現在は施工性・効率性に優れた大型の機械（タイヤローラなど）であるのに対して、大野城が築かれた時代は人間が棒を用いて少しずつ丁寧に突き固めていた。これらは、現代的に考えれば、原始的かつデメリットのように思えるが、逆に、人間が一層毎に丁寧に土を積み重ねていったことによって、現代より緻密で堅固な盛土が構築可能となり、現代の基準では考えられない急角度の城壁を実現できたと言い換えることができるのである。



版築による土塁築造復元図（行橋市教育委員会提供）



検出された土塁断面と縦柱の痕跡（北石垣城門東側）



1層毎の厚さは概ね10cm前後が多い

3. 版築と呼ばれる盛土技法に迫る！その2～古代の現場における盛土管理方法を推察する～

さらに話を深めていきたい。古代の土塁築造の現場ではどのような盛土の管理。つまり突き固め回数や施工時の土の水分量などをどのように規定していたのか。このことについて、筆者が過去に実施した

経験を基に推察していく。

現代では“現場における密度試験の結果”や“機械で転圧する回数”などの基準値を用いて締固めを行った盛土の品質を規定しているが、往時はどのように規定していたのだろうか。それを調べるため、平成17年の冬に焼米ヶ原の近くにて試験的に人力盛土を行った。そもそも土の強度というのは、回数を多く突けば高くなるというものではない。ある回数までは強度が増加し、それを超えると徐々に強度が落ちる性質を持っているのである。必要以上に転圧を行った状態を過転圧といい失敗例として度々紹介される。堅固な盛土を築くためには、締固めの



試験盛土の状況（平成17年）

の回数が多くても少なくてもいけない。最も強度が出た状態で締固めを止めることこそが重要なのである。古代の人々は、何回棒で突けばピークの状態になると考えていたのか。答えから先に言うと、それは人により異なるというものである。体格が良い作業者が大きな直径の棒で突いた場合と、一般体型の作業者が小さな径の棒で突いた場合では回数が異なるという意味であり、考えてみれば当然のことと言える。実際の試験盛土では、回数とは関係なく強度がピークを示した際に感じる棒の跳ね返り具合が重要であるとの結論を得た。その際には最も棒の跳ね返りが良くなることが、実際に作業を行うと感覚として何となく分かってきたのである。そして、それこそが棒で突くのを止めるサインであり、古代の現場では、この感覚を共有させるように指揮官から命令されていたのではないかと考察できたのである。

一方、堅固な土構造物を築造するためには、土塁に用いる土の水分量の管理も大変重要な要素といえる。いくら最適な締固めを行ったとしても、土の水分量が多くてはドロドロとなり、少なくてはおろおろになるからだ。水分量についても、締固めと同様に最適な状態（＝最適含水比）が存在し、それを維持していくことが大切ということになる。最適含水比は土ごとに違うため、現代の工事では用いる土の最適含水比を予め算出した後に本施工を行うが、古代の人々は水分量の管理をどのように行っていたのか。これについても、先述の試験盛土により様々な水分量を試すことにより感覚として知ることができた。それは、右の写真に示すように、土を握って手を開くと形がそのまま残り、それを少し振ると元の状態に戻るほどの水分量である。こちらも感覚的な表現であるが、当時もこのような会話を現場で行いながら作業員へ指示されていたものと推定される。



適切な水分量の目安

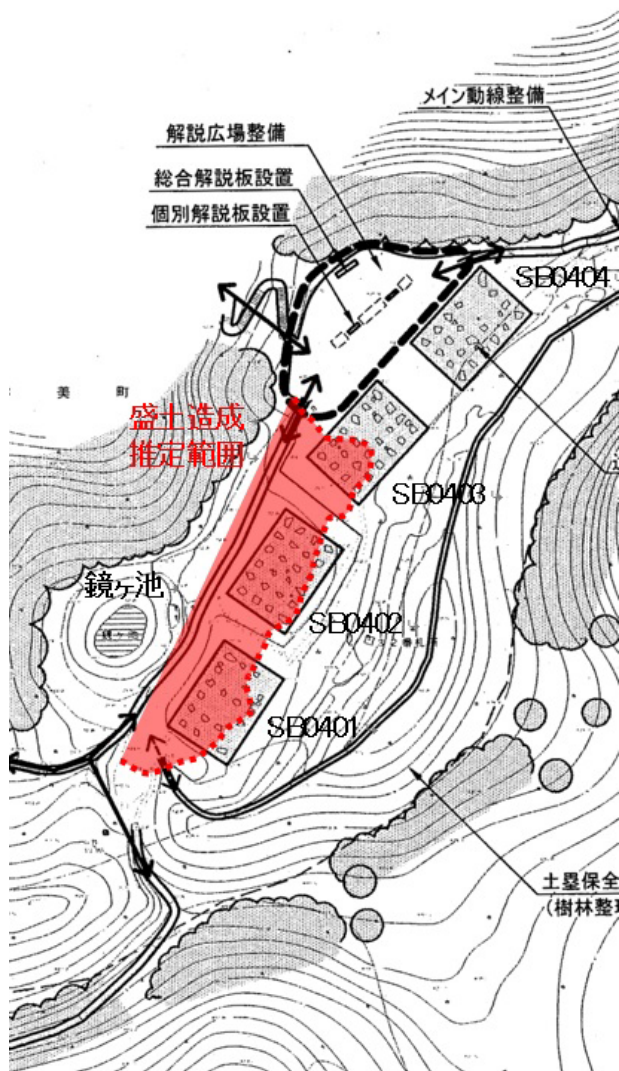
4. 様々な盛土技術の使い分けと鏡ヶ池が涸れない理由

城の南東部、太宰府口城門の北西に増長天礎石群という場所がある。城壁（土塁）の内部に「建物群4棟」と「鏡ヶ池」と呼ばれる遺構を残すが、礎石しかないことから往時の姿の理解が難しいとの意見を来訪者から多く受けていた。福岡県は、これを解決するために九州歴史資料館に発掘調査を依頼し、

得られた情報を基に建物跡とその周辺についてイラスト復元を行った。この際、建物に関する情報とともに建物跡平坦地の造成方法についても知り得た。その方法は、右図に示したように、丘陵を平坦に切って発生した土を谷部に落とし込み造成を行ったものであり、一層当たりの厚みも20cm以上で大きくばらついていた。また、土の締まりも土塁と比べれば明らかに緩く、現在に例えれば、丘陵上で行われる団地造成をイメージさせるものであった。さらに、平坦地内側に設けられた斜面の角度も、先述した現代の安定基準（およそ30°（勾配1：1.5～1：1.8））とおよそ同じで、城壁に比べれば明らかに緩やかなものであった。

以上のことから、〈古代の盛土〉＝〈版築〉ではなく、実は現代とあまり変わらない盛土方法（ただし人力盛土）を既に持っており、城壁など急勾配の盛土を行う際に限定して「版築」という技法を用いたと考察された。古代の人々は、いくつかの盛土技法の中から状況に応じて適切な方法を臨機応変に使い分けていたということである。

さらに、右図の盛土造成推定範囲（図の赤い部分）を見れば、建物跡西側に位置する「鏡ヶ池」が盛土造成部に該当することがわかる。この池は、水が涸れないために雨乞いなどに利用されたことで有名であるが、盛土を行う際に古代の人々によって水が涸れない仕掛けが成された可能性が高いのである。確定させるには発掘調査を行わねばならないが、谷部には水が流れ落ちることを利用して、ただ単に埋めるだけでなく、粘性土を巧みに利用して遮水を行った古代の叡智の一つと考えるが如何であろうか。



増長天礎石群の盛土造成範囲

おわりに

大野城という広大な城を築くためには、ここで紹介した以外にも数えきれないほどの技術や工夫が駆使されているはずである。時間や書面の関係から一部の紹介にとどまったが、文中に示した内容だけでも、種々現場条件に極めて柔軟に対応しつつ、幾つもの困難な土木工事を達成していった古代の人々の姿やレベルの高い技術を感じていただけたのではないかと思います。今後も「土木技術」の視点から、古代技術者の工夫や労苦を伝えていければ幸甚である。

参考文献

- 九州歴史資料館 2015『大宰府史跡ガイドブック2 特別史跡大野城跡』
- 山内豊聡 1993「土木、その過去・現在・未来」『遺跡の地盤工学に関する寄稿集』
- 福岡県教育委員会 2010『特別史跡大野城跡整備事業V－上・下巻－』
- 入佐友一郎 2009「大野城跡に見る古代の土木技術」『古代の福岡』、海鳥社

第6章

大野城と古代日本の戦争

小嶋 篤

はじめに

大宰府北方の防衛施設である水城・大野城は、古墳時代に築かれた前方後円墳を凌駕する巨大な建造物である。水城・大野城の整備は大宰府の整備とも連動し、国家事業として多大な労働力と資源が投下された。しかし、如何に「濠を深く、城壁を高く」築こうとも、防衛施設を運用するための諸条件（兵士・兵器・食糧等）が整備されていなければ、その真価は発揮できない。本章では、防衛施設運用の諸条件の一つである古代兵器から「筑紫の大城」に迫る。

1. 大野城と兵器

(1) 大野城跡の発掘調査で兵器が出土していない理由

大野城をはじめとした古代山城では、西日本各地で発掘調査が進められているが、発見された兵器の数量は極めて微量である。大宰府により大野城・基肄城とともに整備された鞠智城は、城内の中核地区（長者原地区）で面的な発掘調査が実施されたが、鉄鏃1点（鏃式長頸鏃）が出土したに過ぎない。大野城跡も城門や倉庫（礎石建物）を中心に発掘調査が複数地点で実施されているが、兵器は未確認の状況にある¹⁾。

兵器が大野城跡の発掘調査で出土していない理由は、大きく二つある。一つは、大野城を主戦場とした戦争が起らなかったためである。大規模戦闘が生じていない以上、当然ながら戦争痕跡となる兵器は出土しない。なお、主戦場として機能した古代山城は、壬申の乱で落城した「三尾城」が文献史料で確認できる唯一の事例である（※高安城は交戦前に放棄）。もう一つの理由は、兵器の管理が厳重になされていたためである。律令では、兵庫に納める兵器の種類（長柄武器や指揮具等）や兵庫の守衛に関する罰則規定が細かく定められており、法的理念・規則が貫徹されていたならば、古代山城の城内で兵器が埋没する事象は発生しない。しかし、兵器と同様に城内に備蓄されていた食糧は「炭化米」として考古資料で確認でき、火災等の偶発的事象や埋納等の儀礼行為により埋没した事例が存在する可能性がある。

(2) 大宰府保有兵器の実態

では、戦時下の大野城ではどのような兵器の運用が構想されていたのだろうか。平時における大宰府都城（水城・大野城・基肄城等）の管理は、複数の文献史料（『日本書紀』・『続日本紀』・木簡等）から、大宰府が担っていたことが実証できる。古くは、壬申紀の筑紫大宰・栗隈王の発言から、大宰府の前身となる筑紫大宰も大野城を管理していたと考えられる。つまり、大宰府都城の防衛に際しては、当然ながら大宰府保有兵器の運用を構想していただろう。

近年の大宰府政庁周辺官衙跡の発掘調査により、大宰府出土兵器の数量は急激に増加した（小嶋2014・2017c・2018）。出土した鉄製品は高温度の被熱痕跡があり、製品の形状を残しつつも、大半が半溶解のような形態で出土する。被熱原因の特定は現在も継続中であるが、鉄鏃が軸を揃えた状態で束のまま（保管形態のまま）被熱すること等から、遺物観察の所見では「兵庫火災」が有力な仮説となる。このような被熱鉄製品の出土は類例に乏しく、上述したような偶発的事象の産物である。なお、大宰府の兵庫に

関わる文献史料には、『日本三代実録』貞観11年(896年)12月庚子17日条「大宰府庁事并門樓兵庫」の記載がある。本記載に注目した松川博一氏は、大宰府の兵庫が大宰府政庁の近くに所在した可能性を指摘している(松川2012)。

被熱鉄製品の出土量から兵器の備蓄の裏付けがとれるのは、矢(鉄鏃)である。鉄鏃は軸を揃えて、かつ同一部位付近で溶着していることから、束ねられた状態で被熱したと判断できる。矢と対となる弓は、弓の装飾部品である「両頭金具」の存在から備蓄対象であったことが確認できる。甲冑も複数種類の鉄製小札の存在から、備蓄が認められる。鉄製小札は希少価値の高い武具であり、その備蓄主体が大宰府であることを示す状況証拠の一つでもある。

以上のように、有機質素材の焼失という資料的制約があるものの、弓矢・甲冑は考古資料から兵器の備蓄が確認できる。戦闘時の消耗品である「矢」の備蓄数が最も多く、長距離戦闘用の兵器である「弓矢」が大宰府保有兵器の主力であったと認めてよい。考古資料で確認できる弓矢の備蓄は、『続日本紀』の記事でも確認でき、701年から716年にかけて「弓・梓弓500～5,374張」が大宰府に輸送されている。近距離戦闘用の兵器には鉄矛・鉄槍等の長柄武器、鉄刀・鉄剣があるが、出土品は断片であり、現状の出土品から備蓄を肯定することはできない。同様に律令軍団を特色づける指揮具(鼓・旗等)の実態についても課題を残す。

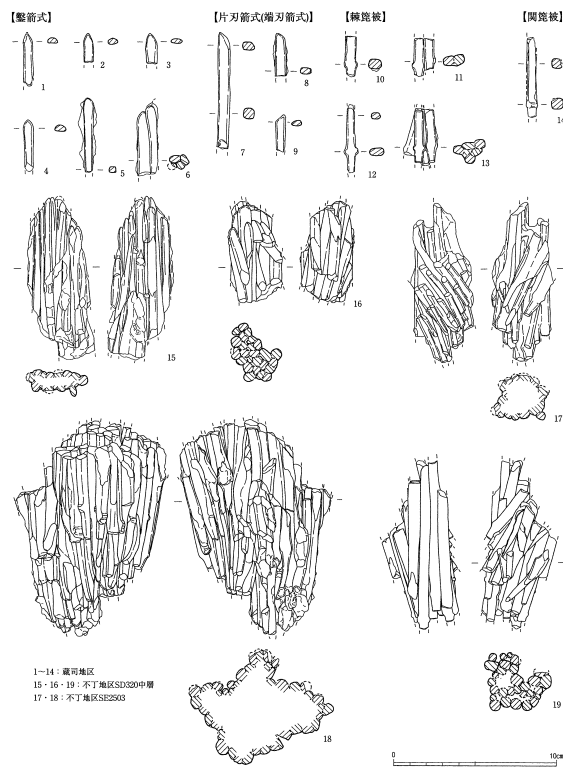


図1 大宰府政庁周辺官衙跡出土被熱鉄鏃



画像1 X線CTスキャナの断面画像

X線CTスキャナを利用することで、表面では観察できない皮金具内部の状況が把握できる。

画像1では、皮金具と芯金具が密着しておらず、芯金具がある程度可動する構造であったことが分かる。また、両頭金具の破損状況も確認でき、保存処理での処置方法も検討できる。

画像2では、肉眼では観察しづらい両頭金具の折り返し部の微細部位を三次元画像で図示している。



画像2 X線CTスキャナの三次元画像

図2 大宰府政庁周辺官衙跡出土被熱両頭金具

次に大宰府保有兵器の主力である弓矢の製作時期を整理する。鉄鏃は尖根系長頸鏃が主体であり、平根系鉄鏃はごく少量が確認できる。刃部形式を列挙すると、尖根系長頸鏃は柳葉式・三角形式・鑿箭式・鑿根式・片刃箭式・端刃箭式の6種類、平根系鉄鏃は三角形式と思われる資料が断片的に見られる。鉄鏃組成の主体となるのは鑿箭式長頸鏃であるが、片刃箭式・端刃箭式長頸鏃の数量も多い。鉄鏃の篋被形態は大半が棘篋被で構成されており、わずかに関篋被を含む。これらの特徴をもつ鉄鏃は、7世紀後半に造営された終末期古墳や土坑墓の副葬品に数多く見られる。また、弓の存在を実証する両頭金具も、古墳時代後期に流行した弓の装飾部品である。つまり、大宰府保有兵器の主力である弓矢には、7世紀以前（飛鳥時代以前）の製品が数多く含まれていることがうかがえる。

（3）奈良時代以前の兵器備蓄事例

大宰府政庁周辺官衙跡で確認できた「矢」の備蓄は、大宰府南方に位置する小郡官衙遺跡でも認められる。小郡官衙遺跡出土鉄鏃は、尖根系長頸鏃（鑿箭式67点、片刃箭式31点、三角形式1点）を主体とし、平根系鉄鏃（2点）がわずかに加わる。これらの鉄鏃群は、大宰府政庁周辺官衙跡出土品と同一型式で組成も類似しており、同時期の製品に位置づけられる。

矢の備蓄は奈良東大寺正倉院でも認められ、鉄鏃3,542本、竹鏃192本、骨鏃44本、角鏃3本を含む3,800本余が伝世している。鉄鏃は尖根系長頸鏃（鑿箭式2,472点、片刃箭式759点、三角形式96点）を主体とし、平根系鉄鏃（方頭式187点、三角形式26点、飛燕式2点）を含む。また、これらの矢には棘篋被形態のものや「下毛野奈須評」銘が認められ、7世紀後半に製作されたものも含む（津野2015）。

このように、奈良時代以前の兵庫には、長距離戦闘用兵器である弓矢が多量に備蓄されていた。しかも、7世紀以前に製作された兵器を多量に含み、長期間にわたる兵器の備蓄が確認できる。また、大宰府政庁周辺官衙跡鉄鏃や小郡官衙遺跡出土鉄鏃は、奈良東大寺正倉院に伝世する鉄鏃の組成とも類似しており、大宰府保有兵器が中央様式に準じていたことが分かる。

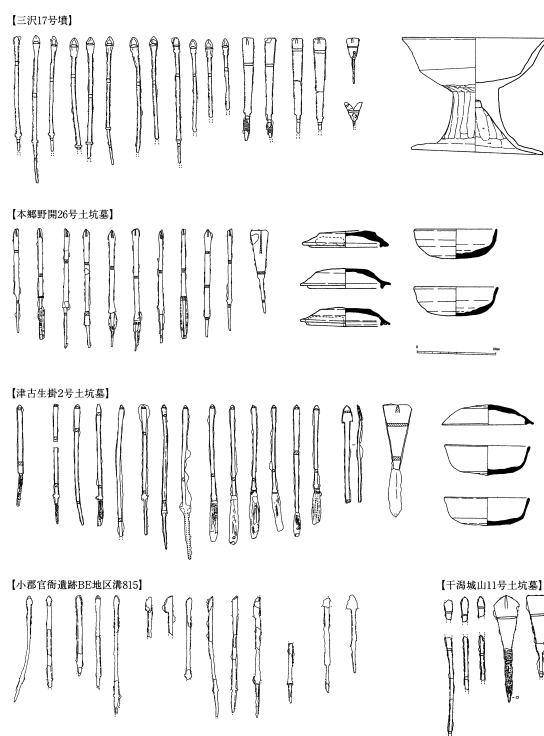


図3 小郡官衙遺跡周辺の鉄鏃

小郡官衙遺跡出土鉄鏃は、奈良東大寺正倉院に伝世する鉄鏃の組成とも類似しており、大宰府保有兵器が中央様式に準じていたことが分かる。

2. 大野城の防衛

（1）古代兵器にみる古代山城の「日本化」

飛鳥時代以降の兵器は、弩や綿襖甲をはじめとする新式武装の導入が図られる一方で、基本装備は古墳時代の武装を継承していることが指摘されている（津野2015）。大宰府保有兵器の主力である弓矢も、古墳時代に流行した両頭金具付属弓や棘篋被の長頸鏃（7世紀）を多量に含んでおり、様式継承だけでなく備蓄兵器自体も継承する実態が明らかとなった（小嶋2014）。

古代山城は朝鮮半島での軍事活動を通じて、7世紀にはじめて日本列島に導入された防衛施設である。古墳時代の戦略では恒常的な防御施設の設置概念は希薄で、古代山城の出現には従来の戦略との断絶面を認めることができる。その一方で、実際の戦闘では古墳時代以来の武装を用いた遠距離戦闘（陣地戦）

を継続しており、古墳時代の戦術との連続面も評価しなければならない。

（２）古代山城と古代日本の戦争

『日本書紀』記載の集団戦闘を分類すると、その形態は「①防御施設の包囲（焼き討ち）」、「②交通路の封鎖」、「③会戦・陣地戦」、「④突撃・追撃」、「⑤奇襲（夜襲）・伏兵」に大別できる²⁾。また、戦時下の古代山城の運用事例では「高所からの軍勢把握」と「敵軍視認後の対処的迎撃」が確認できる。大野城の山麓は狭い谷筋を除くと、おおむね山頂部尾根線（城壁）からの眺望が利き、城壁土塁からの弓矢・弩矢の射程範囲外で敵軍を視認することができる。また、山裾から平野にかけては切れ間なく眺望が利くことから、戦略的視点での軍勢把握が可能な立地となる。

しかし、壬申の乱や藤原広嗣の乱をはじめとした文献史料の記事では、古代山城を運用していた時代においても、防御施設を主戦場とした集団戦闘の記事は乏しい。古代日本の戦争で最も重視されたのは、交通路（官道）の封鎖であり、峠の会戦や河川（渡河地点）を挟んだ陣地戦（置盾を基点とした軽装弓兵による陣地構築）が主体的な集団戦闘の形態であった。大野城は戦時における大宰府の「逃げ城（竈城）」としての性格がひろく知られているが、『日本書紀』記載の集団戦闘事例と照合すると、四方の山裾にのびる官道が開戦時の迎撃地点として構想されていたと考える。官道と古代山城の関係は古くから指摘されている研究視点であるが、古代兵器の様式と備蓄兵器の実態、『日本書紀』記載の集団戦闘形態をふまえると、戦時下の官道では「峠」や「渡河地点」がより重要となる。

おわりに

戦場や陣营地となる頻度の高い渡河地点は、河川による削平により考古学からの実態把握が難しい場所となる。その実態把握では、官道や流路の変遷、古環境等の情報を蓄積し、実証的に明らかにする必要がある。また、古代兵器の実態（古墳時代武装様式と備蓄兵器の継承）から古代山城の戦術的運用を想定したとき、城壁からの視認領域の確保は絶対条件となる。山麓部の層位的検出をふまえた花粉分析等による古環境把握が、大野城の運用だけでなく、「大宰府都城の景観」復元にも欠かせない研究課題である。

参考文献

- 小澤佳憲 2017「大野城跡出土の鉄製武器」『九州歴史資料館研究論集』42 九州歴史資料館
小嶋篤 2014「大宰府保有兵器の蓄積過程」『古代武器研究』vol.10 古代武器研究会
小嶋篤 2017a「兵器の様相から見た古代山城」『築城技術と遺物から見た古代山城』熊本県教育委員会
小嶋篤 2017b「鞠智城築造前後の軍備」『鞠智城と古代社会』第4号 熊本県教育委員会
小嶋篤 2017c『大宰府の軍備に関する考古学的研究』平成25～27年度科学研究費補助金若手研究（B）研究成果報告書 九州国立博物館・福岡県立アジア文化交流センター
小嶋篤 2018「大宰府の兵器と工房」『大宰府の研究』高志書院
津野仁 2015『日本古代の軍事武装と系譜』吉川弘文館
松川博一 2012「大宰府軍制の特質と展開－大宰府常備軍を中心に－」『九州歴史資料館研究論集37』九州歴史資料館
※本発表は、平成25～27年度科学研究費（若手研究（B）「大宰府の軍備に関する考古学的研究」課題番号25770290研究代表者小嶋篤）の成果の一部である。成果全体は小嶋2017cでまとめている他、小嶋2018で研究史を中心とした要旨を公表している。

註

- 1) 本章（『大城（大野城）の謎に迫る！』『古代兵器から迫る！』2016年2月27日初出）の公表後、2017年に小澤佳憲氏が大野城跡出土鉄製武器の資料紹介を行った（小澤2017）。この鉄製武器は矛等の長柄武器の袋部片で、災害に伴う不時発見を経て、九州歴史資料館に保管されたものである。
- 2) 『日本書紀』記載の集団戦闘については、小嶋2017a・2017cで整理している。また、小嶋2017bでは鞠智城跡を中心に戦術的運用の検討を行っている。

第7章

大野城と宇美の歴史的繋がり

松尾 尚哉

はじめに

『日本書紀』天智天皇4年(665)に築造記録がある「大野城」。国特別史跡に指定されているこの重要な遺跡は、宇美町・太宰府市・大野城市にまたがる四王寺山に所在しており、尾根沿いに連なる土塁(城壁)や石垣、城門跡や建物跡などがよく残っている。

本論では、大野城内の約8割が所在する地元・宇美町からみた「大城(大野城)の謎」に迫る。また、今回は新発見資料も公開し、さらに謎の奥深くまで迫りたい¹⁾。

1. 大野城(四王寺山)と宇美の深い繋がり

まず、大野城が所在する四王寺山と宇美との深い繋がりについて説明したい。大野城は大宰府関連遺跡であり、白村江の戦いで敗北を喫した倭(日本)が、664年に水城、665年に大野城・基肄城といった防御施設を築造し、大宰府都城が成立した。このため大宰府政庁が存在する太宰府市側との関係性が取り上げられ、宇美町は裏側というイメージが強いものと思われる。しかし、江戸時代の宇美の人々にとってそれは異なったイメージであり、四王寺山を意識している点が多々見られる。

これを示すものが、大城山の頂上部付近に所在する毘沙門堂である。

「筑前國続風土記拾遺」の表糟屋郡四王寺村の項に、「村(四王寺村)の西の峰高き所に在。石の堂也。石像長一尺八寸計有、近年別に木像を作て傍らに置ケたり。」という記述があり、その始まりは応永年間で、文政年間に本堂が建ったと伝わる。この毘沙門堂の前面に、弘化4年(1847年)銘の「奉納糟屋郡産村大庄屋格小林虎太」と刻まれている鳥居がある。この小林虎太は、寛政5年(1793年)創業で、長い歴史をもつ宇美町の造り酒屋「小林酒造(通称：萬代)」の3代目当主である。虎太は、家業を発展させるとともに、地域の土木事業などに貢献し、幕末期には福岡藩の撫育方を勤め、孫の代まで大庄屋格の扱いすると申しつけられた地元の有力者であった。さらには、文久の政変で都落ちをしてきた公家「七卿」のうち、太宰府へ移った「五卿」たちとも親交を持った人物である。のちの太政大臣三条実美公らは、虎太が建てた別邸「竹亭」で酒を酌み交わし、歌を詠んだ記録が残っている。

このように、宇美の有力者が毘沙門堂の鳥居を建立していることから、江戸時代において四王寺山という地は、宇美にとっても深い信仰の場であったといえる。

また、大正時代に入ると、それまでは都府楼跡や太宰府天満宮という太宰府観光の一部として捉えられていた四王寺山が、宇美町側からの観光ルートの一つとなってきた。この契機となったのが、吉塚から志免を経て宇美に至



四王寺山パンフレット「大福岡市近郊の名山 四王寺山」

り、終点の宇美勝田までを通る「筑前参宮鉄道」の全線開通（大正8年）である。この鉄道は、石炭の輸送に加え、観光客を運ぶ目的をもつ路線であった。昭和5年に筑前参宮鉄道が発行した四王寺山の観光パンフレットには、宇美八幡宮から四王寺山を巡る案内図が掲載されている。キャッチフレーズに「本邦最古の国防城趾と史上に輝く古戦場の視察へ」とある点や「宇美八幡駅より完備した道標あり」という文字も見られることなどから、宇美八幡宮から大野城・四王寺山観光という事業に力を入れていたことがうかがえる。この観光事業はさらに発展し、福岡日日新聞社（現在の西日本新聞社の前身）も「糟屋郡宇美町四王寺山古蹟案内図」というチラシを昭和6年に発行している（昭和14年増刷）。また、これと連動し、江戸時代後期に四王寺山に建立された、四王寺三十三体石仏を巡る「千人詣り」という行事も行なわれている。

以上、宇美町にとって、大野城・四王寺山という存在は、古くから身近な信仰の場であるとともに、近代に入ると観光の目玉として組み込まれていくという深い繋がりがある。

2. 前田地区の再検討と地元の伝承



「館」銘墨書土器



「館」銘墨書土器拡大

大野城内の中心部に、前田地区が存在する。ここは、「館」銘墨書土器や文様罫など、城内の謎に迫る資料が出土している地区である。この資料は、内部の様相を解き明かすものとして、数々の企画展等に出展され、図録等にも掲載されているが、その出土状況について、明確にされていないのが現状である。

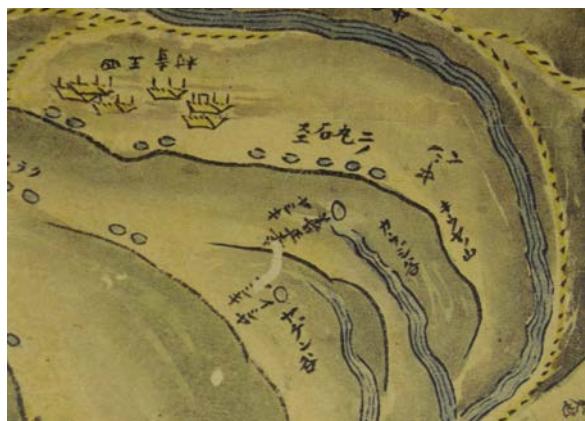
これらの資料は、昭和52～53年にかけて、県民の森管理事務所近くにある宇美町大字四王寺の住宅地（通称：前田地区）の斜面部から、8世紀代の須恵器・土師器数点とともに採集されたものである。「館」銘墨書土器は、須恵器皿の底部に墨書があり、宇美町文化財調査報告書第2集「塔ノ尾遺跡」で紹介されている。文様罫は、宝相華文と周縁をめぐる珠文が施されたタイプであり、大宰府政庁跡・学校院跡・観世音寺など大宰府史跡の限られた場所で出土しているものと同様である。

さて、これらの資料は、大野城内に役所的機能を持つ建物の存在の可能性を示すものである。現状で確認されている建物跡の多くは、総柱の礎石建物であり、稲倉であったと考えられている。しかし、この前田地区から北側に位置する主城原地区では、官衙風の3間×7間の掘立柱建物が確認されており、この主城原地区から連なる前田地区にかけて、役所的機能を持つ建物があったことも想定される。

「太宰府旧蹟全図北図」では、四王寺山（大野城内）の地名が詳細に記されており、建物跡の記述もみられる。前田地区については「二ノ丸石スエ」と、主城原地区については「三ノ丸石スエ 主城カ原 此处主城頭役ノ居処」と記されている（本丸については、増長天地区にその記述がある）。この記述は、近世城郭を意識した記述であろうが、主城原地区と同じ規模の建物跡が、前田地区にもあったという認識が示されており、興味深い資料といえる。大野城司や主城と呼ばれた施設の存在を今後検討していく



文様埴



「太宰府旧蹟全図北図」での前田地区

必要がある。

また、現地を踏査すると、主城原建物群と同等規模の平坦地が6か所ほどみられる点や、先の「太宰府旧蹟全図」で、主城原建物群の「三ノ丸石スエ」とは別に「二ノ丸石スエ」と表記している点からも、主城原建物群とは別に、独立した建物跡が存在する可能性も十分に考えられる。また、少し地点は離れるが、遠見所から村上礎石群へ向かう箇所では、谷をふさぐように土橋状の道が存在している。このような箇所は他にも見られ、これらは大野城の土塁が外周だけでなく、内部にも同様の技術を用いて構築された遺構が存在する可能性もあるといえる。

また、地元の古老へ行った聞き取り調査では、四王寺区住宅地の北東に存在する水田を耕作中、羽子板状の石組を確認したとの内容があった。時期は不明であるが、何かしらの機能を持つ可能性もあり、大変興味深い。なお、その石組みの石材は、現在も水田脇に積み残されている状態である。

3. 独鉈杵の発見

宇美町民の方が四王寺山に登山中に発見されたものである。その後、九州歴史資料館において、仏教美術史担当の井形進学芸員と、共同で調査研究を行った。また、同館の保存科学班で蛍光X線調査などの科学分析調査を実施した。さらに、金属工芸史を専門とする九州国立博物館の望月規史氏に実見していただき、ご教示とご見解を頂いた。

独鉈杵は、青銅製鑄造で、先端がやや鈍化しているものの、全長は19.6cm、把長は6.1cm、鉈長は6.7cm程度である。比較的ずっしりとした重みを感じさせる。軸にゆがみがほとんどみられず、把中心部分には楕円形をした二重で盛り上がった鬼目が四つめぐり、その左右には、八葉の蓮弁帯がみられる。蓮弁の鑄は少し弱い印象を受けるが、その真ん中を締めている三本の紐は均一の太さであり、きつく締めている描き方をしている。鉈部分の面は、窪ませて匙面となっている。一部で緑青がみられるが、現状では青黒い色となっている。

共同調査の結果、この独鉈杵のかたちは、古式であり、本来の武器としての面影をのこし、鉈が把よりも長く鋭さを感じさせ、鉈に匙面をつけ、把の蓮弁を締める紐帯の紐が、三本であることなどは、平安時代後期を中心とする頃の作例の特徴を示すものであることがわかった。各部に抑揚をつけ、全体として優美かつ端整な姿をしていることも同様に、当該期頃の特徴を示しているものといえる。

蛍光X線による分析調査では、銅を主としつつ、鉛を含み、錫をわずかに含む組成であった。その他には、砒素の検出も見受けられるとのことであった。精錬の過程で砒素などの不純物は除去されるため、新しい時代になるとこれは検出されない。よって、このような成分が検出されたことは古い要素を示すものというご教示を頂いた（九州歴史資料館保存科学班）。また、X線CTスキャナによる調査におい



独钴杵（北岡進一氏撮影）

ては、X線が内部まで通らなかったことから、鉛を多く含む内部構造であると考えられる。

さて、大野城築造後、この山では、宝亀5年（774）に、新羅の呪詛に対抗するべく、高頭浄地に四天王像を安置した四天王寺（四王院）が創建される。その後、平安時代前期、仁寿元年（851）には、後に天台座主となった智証大師円珍が、唐へ渡る船を待つ間、城山四王院に滞在したという記録があり、さらには、平安時代後期に入ると、経塚が集中的に造営されていく（ここから出土した多くの経塚出土遺物は宇美八幡宮の所蔵）。このことから、この時期の独钴杵という密教法具が発見されてもおかしくない歴史的環境にあるといえよう。

あくまで表採資料であるため、この遺物について詳細を検討することは困難といえる。しかし、この独钴杵は、平安時代後期頃に制作された密教法具の貴重な例であることから、これを機に、これまであまり調査が行われておらず、その実態が謎に包まれた四天王寺の本格的調査の契機としたい。

この独钴杵の出土からも、大野城（四王寺山）の未知の領域は、まだまだ広がっていくことが容易に想像できる。なお、四王寺山発見の独钴杵について、資料紹介と検討を行ったのは、本論が最初である。継続する今後の資料調査に期待したい²⁾。

註

- 1) 本論は、2016年2月27日に開催した、宇美町と九州国立博物館の共同主催によるシンポジウム『大城（大野城）の謎に迫る！－宇美町からの新たな発信－』の発表要旨である。
- 2) 本論発表後、井形進氏による詳細報告（井形2016）、岡寺良氏による四王院跡及び四王寺山経塚群との関係性に関する考察（岡寺2018）がなされている。

参考文献

- 橋詰武生編1958『小林作五郎伝』
 宇美町誌編纂委員会編1975『宇美町誌』宇美町役場
 宇美町教育委員会編1981『塔ノ尾遺跡』宇美町文化財調査報告書第2集
 青柳種信・福岡古文書を読む会校訂1993『筑前國統風土記拾遺』文献出版
 福岡県教育委員会編2010『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ』福岡県文化財調査報告書第225集
 関根俊一2011『日本の美術 541 金剛鈴と金剛杵』ぎょうせい
 四王寺山勉強会編2015『太宰府旧蹟全図に描かれた四王寺山』
 九州歴史資料館編2015『特別展 四王寺山の1350年』九州歴史資料館特別展図録
 熊本県教育委員会編2016『築城技術と遺物から見た古代山城－古代山城に関する研究会 発表資料集－』
 井形進2016「（資料紹介）四王寺山の独钴杵」『九州歴史資料館研究論集』41
 岡寺良2018「四王院跡と四王寺山経塚群」『大宰府の研究』大宰府史跡発掘50周年記念論文集

第8章

大野城築城と新羅

上田 龍児

はじめに

663年、百済復興支援のため出兵した日本（倭）は、白村江の戦いで唐・新羅連合軍に大敗を喫した。翌664年には水城、665年には大野城・基肄城といった防衛施設を築造し、水城・大野城・基肄城を外郭とする大宰府都城が成立した。大宰府都城は、百済最後の都である泗沘都城との類似性から百済系都城とも呼ばれる。また『日本書紀』によると「達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣わして、大野と椽、二城を築かしむ。」とあり、大野城・基肄城が亡命百済官人の指導により築造されたことを伝える。

7世紀の日本（倭）は百済と同盟関係にあり、大野城をはじめとする大宰府都城も百済との関係性の中で成立したことが通説となっている。一方、新羅との関係は白村江の戦いで敵国であったこともあり、緊張関係・敵対関係にあったというイメージが強い。ところが、大野城跡がある四王寺山の麓に位置する大野城市乙金地区では、新羅土器をはじめとする7世紀前後の新羅系文物が集中する様相が明らかになっており、新羅との関係を看過できない状況になってきた。以下では、乙金地区の発掘調査成果を通じ、大野城築造と新羅との関係について、その可能性が探っていきたい。

1. 大野城市乙金地区の発掘調査成果

大野城跡が位置する四王寺山の北側に、乙金山という円錐形をした小さな山がある。乙金山の麓には、古墳のほか集落跡や須恵器窯跡など多くの遺跡が分布する。ここでは、6・7世紀の遺跡を中心に見ていくこととしよう。

【古墳群】 乙金山麓には総数100基を超える大規模な群集墳があり、総称して乙金古墳群と呼ぶ。古墳群の形成は5世紀後半に始まり、6世紀後半に分布範囲が拡大する。6世紀末～7世紀前半には最盛期を迎え、7世紀後半まで継続する。

このうち善一田古墳群は総数30基ほどの古墳群である。6世紀後半に造られた18号墳は直径約25mの円墳で、乙金古墳群中最大規模となる。馬具や盛矢具をはじめ豊富な副葬品があり、当地域を代表する有力な人物の古墳と考える。副葬品の中で最も注目できるのは「鉄鉗」で、被葬者は金属器生産集団の統括者という性格を付与できる。18号墳以外でも、鉄滓・銅滓や砥石を供献・副葬する古墳があり、金属器生産に関わる集団の古墳といえる。また、象嵌大刀や三累環頭大刀などの装飾大刀を副葬する古墳もあり、比較的有力な集団の墓域と考えられる。この他、新羅土器や朝鮮半島系軟質土器も出土した。

王城山古墳群は善一田古墳群の南に隣接する総数40基ほどの古墳群である。10点を超える新羅土器が出土しており、新羅と積極的な交流を展開した集団の古墳群と考える。渡来系鍛冶工人と関わる遺物とされるミニチュアの農工具もあり、鉄器生産との関わりもうかがえる。

【集落】 乙金古墳群に葬られた人々の集落と考えられるのが、薬師の森遺跡である。6世紀中頃～7世紀中頃にかけての住居跡が100軒ほど見つかった。鉄滓や韃羽口が出土し、集落内で鉄器生産をしていたことが確実である。また、軟質系土器をはじめ一定量の朝鮮半島系資料が出土しており、渡来人が居住していたことを示す。

【須恵器窯跡】 乙金窯跡（6世紀中頃～後半）と雉子ヶ尾窯跡（6世紀後半～7世紀前半頃）がある。いずれの窯跡も、朝鮮半島に特徴的な土器作りの技法や形態を持つ須恵器を生産しており、窯業生産に

渡来人が関与した可能性がある。

2. 乙金地区の新羅系文物

【土器】 最も顕著な存在は新羅土器である。王城山古墳群で10点程度、善一田古墳群で2点、唐山古墳群で1点、薬師の森遺跡で1点確認しており、半径1 km圏内に15点近くの新羅土器が集中する。6・7世紀代では全国的に見ても新羅土器が最も集中する地域の一つである。6世紀末前後～7世紀後半までの間、途切れることなく搬入されていることから、新羅との交流が長期間継続していたことを示す。

新羅土器以外では、脚部に交互透かしを施す在地産の高杯があり、新羅土器の模倣品と考えられる。

【金属器】 善一田古墳群出土の三累環頭大刀と鉄鉗があげられる。三累環頭大刀は元々新羅の王族の間で流行した装飾大刀である。善一田例は舶載品もしくは最初期の国産品の可能性がある。同古墳群では銅滓も出土していることから、国産品であるならば新羅からの渡来系工人が乙金地区周辺で生産した可能性も残る。

鉄鉗の副葬事例は国内では40例ほどあり、善一田例のように握る部分の端部を環状にするものは、国内では鳥栖市東十郎古墳群、朝鮮半島では半島南端部に位置する巨済島の古墳に類例がある。鉄鉗の副葬事例自体は、朝鮮半島の新羅・伽耶地域に多いもので、新羅（伽耶）系資料としての位置づけも可能であろう。

一方で、新羅以外の朝鮮半島系資料の存在も明らかになっている。竪穴住居の一角に住居外側にのびる溝が付く「溝付住居」や須恵器の甕を棺とした「甕棺墓」などがあり、これらは朝鮮半島南西部（百済や馬韓地域）に由来する資料である。

なお、乙金地区周辺には、「唐山」「韓人池」など大陸・半島との関わりを示す地名が残っており、渡来系集団が活動したことを彷彿とさせる。

おわりに

乙金地区では6・7世紀の古墳・集落・生産が相互に関連しながら展開する。新羅に系譜がある渡来人が一定数居住し、彼・彼女らを軸に手工業生産や対外交流を進めていったことであろう。6世紀中頃に始まる手工業生産や朝鮮半島系文物、さらには渡来人といった要素は前代とは連続性がなく、この時期に新たな集団が進出してきたものと想定できる。その背景は、536年に中央政権により那津官家が設置されたことと、これに伴う地域社会に再編によるものと考えられる。

7世紀中頃になると乙金地区では人々の居住の痕跡が希薄となり、窯業生産も停止する。一方、古墳群では7世紀中頃～後半にかけても新規造墓や追葬・墓前祭祀を盛んに行なっている。こうしたことから、乙金地区の集団がどこかで営みを続けていたことは間違いないが、乙金地区で再び集落経営が始まるのは8世紀中頃～後半になってからである。

7世紀中頃～8世紀中頃は、まさしく水城・大野城の築造や大宰府都城の整備が進められた時期で、現在の大野城市・太宰府市を中心に、大土木事業が行われた時代である。このような時代に、大野城の麓で各種手工業生産集団を擁する乙金地区の集団が活躍したであろうことは想像に難くない。また、新羅と絶えず交流を続けていた当地域の集団が、朝鮮半島の山城の情報を知っていたとしても不思議ではない。日常的な生活圏内である四王寺山の様子を知っていたであろう乙金の集団が、大野城築造場所の選定や四王寺山中の案内などに際しても、大きな役割を果たした可能性が充分想定できるのである。

参考文献

上田龍児編 2017『乙金地区遺跡群23』大野城市文化財調査報告書第159集 大野城市教育委員会



写真1 乙金地区の遺跡と大野城

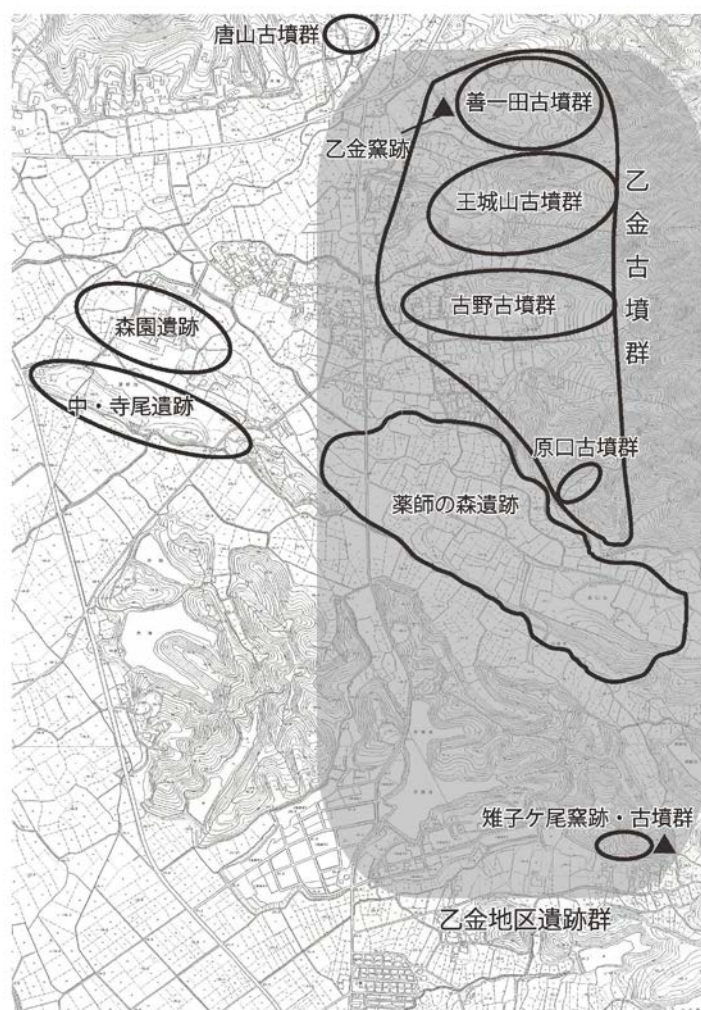


図1 乙金地区の主な遺跡

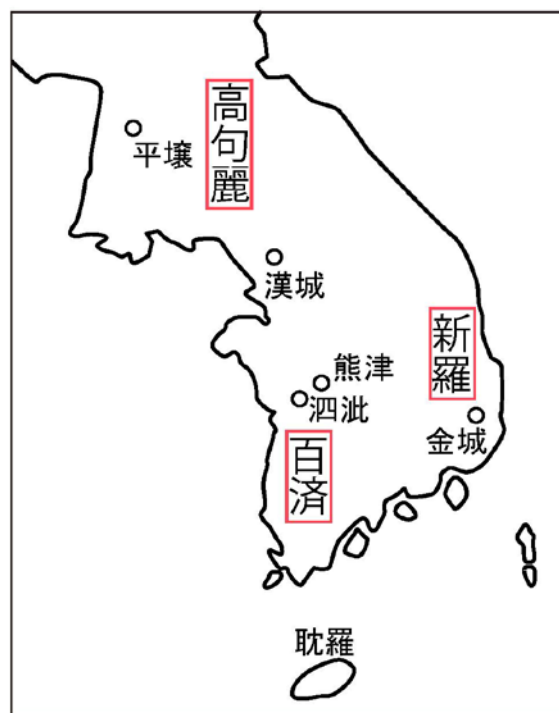


図2 7世紀頃の朝鮮半島



写真2 善一田古墳群全景



写真3 善一田18号墳石室



写真4 乙金地区出土の新羅土器



写真6 善一田18号墳副葬品



写真5 薬師の森遺跡の朝鮮半島系土器



写真7 鉄鉗（左）と供献鉄滓（右）



写真8 三累環頭柄頭（右上）と装身具類